

雅
潤
錄

五

昭和二年七月中浣起筆

特別
14
1919
394



雅間録

昭和二年七月中院起筆

○余が長いご休養をなさるに依り、今年
 秋季早大の四五年度祝典のある際を機として、志願
 をお記念名を宛えとの旨あるを、お母様も
 へん、大いから御任を、おし、おし、おし、今日まで
 打合せの後、お母様を、お母様が、困難であるから
 といふから、お母様の、お母様の、お母様の、お母様の、
 あり、お母様の、お母様の、お母様の、お母様の、お母様の、
 の、お母様の、お母様の、お母様の、お母様の、お母様の、
 紙のこと、お母様の、お母様の、お母様の、お母様の、お母様の、



謹啓 酷暑の候愈々御清穆大賀至極に奉存候陳者早稻田大學は創立四十五年を今秋に迎へ諒闇中なれども記念式典を舉行せらるべく承り申候而して我越佐會も母校と殆ど其齡を同じうし其光輝ある歴史と會員の多數とは學園廣しと雖も他に比するもの無之と愚考いたし候これ偏に會長市島先生の徳望と御指導よろしきを得たる賜と存候就ては此機會に先生多年の御盡力に對し本大學に關係ある新潟縣人の醵金を仰ぎ記念品を贈呈し聊か謝意を表し度候間何卒御賛同相成度此段特に得貴意候

拜具

昭和二年七月

發企人

早稻田大學越佐會

理事 清水泰次
 同 高井忠夫
 同 奧田雲藏
 同 石川勝治
 同 小林堅三
 學生幹事一同

賛成者

石黒大次郎	飯塚知信
石田善佐	今井喜代志
石川文一	饒村義明
遠矢良介	大橋篤之
川上淳一郎	川上一郎
片桐博二	丹吳康平
反町茂作	相馬昌治
坪谷善四郎	中野鐵平
上野喜永次	内山省吾
山田清作	山田隆治
増田義一	松榮俊三
松井郡治	松木弘
松川第四郎	舟崎仁一
小林達四郎	近寅一郎

古田島 和太郎 齊藤庫四郎
 阪口 獻吉 廣井 一
 關 太郎

殿

追て別項の規定御一覽の上至急御申込被下度候

- 一、醸出金額 御一名金壹圓より拾圓まで
- 二、申込期限 本年九月三十日限
- 三、送金宛名 早稻田大學圖書館内越佐會

御送金は可相成郵便爲替にて相願度候も御申越によりては當方より集金郵便又は使の者差出可申候尤も地方は夏季休暇の爲め歸省中の學生諸君に御委託被下候時は最も好都合に御座候

- 四、記念品 記念品の選定は發企人に御一任相成度事
御寄附金に對しては領收書を發送せず事
- 五、收支報告 務終了後早稻田學報紙上又は其他の方法にて必ず御報告可申上事

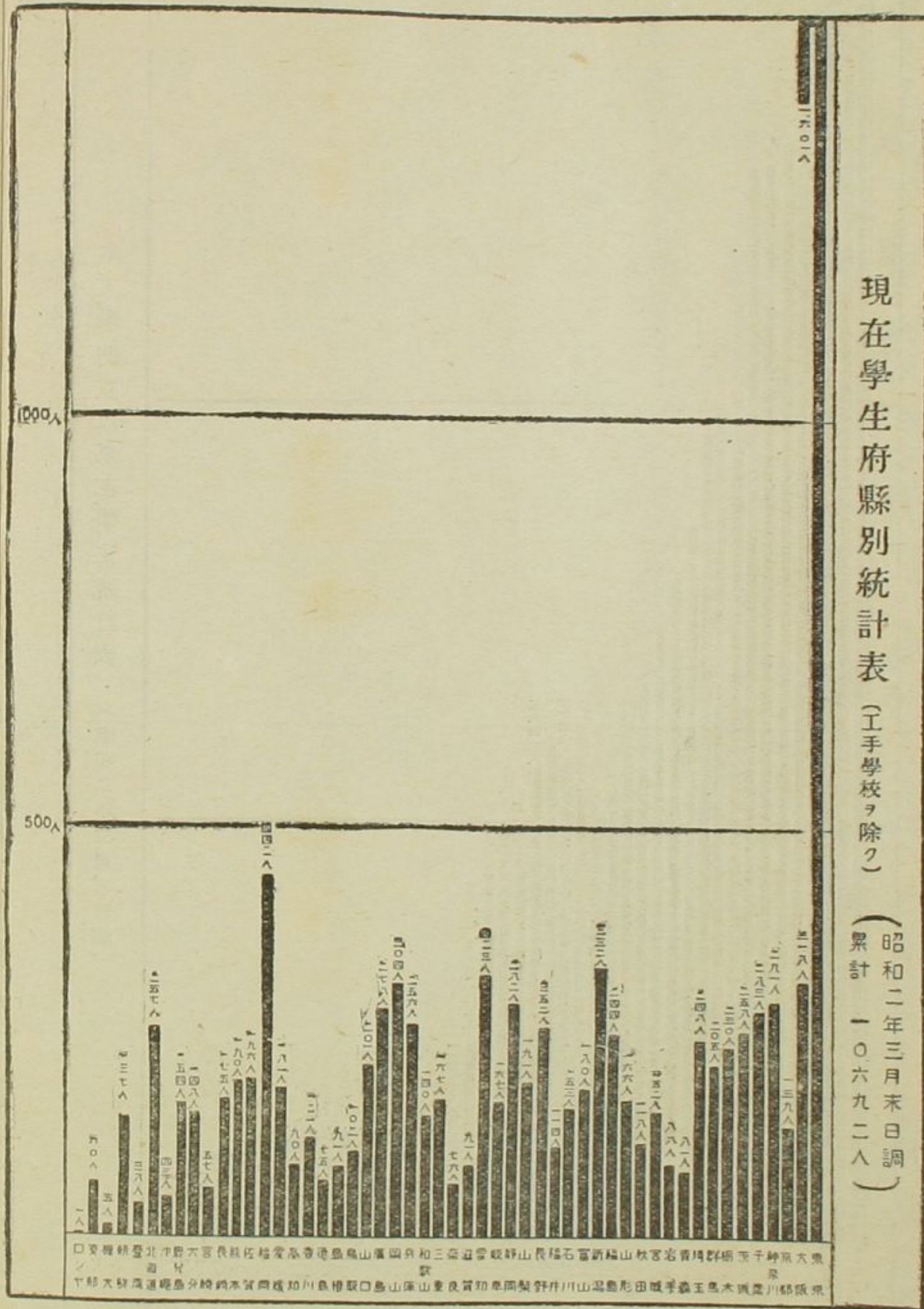
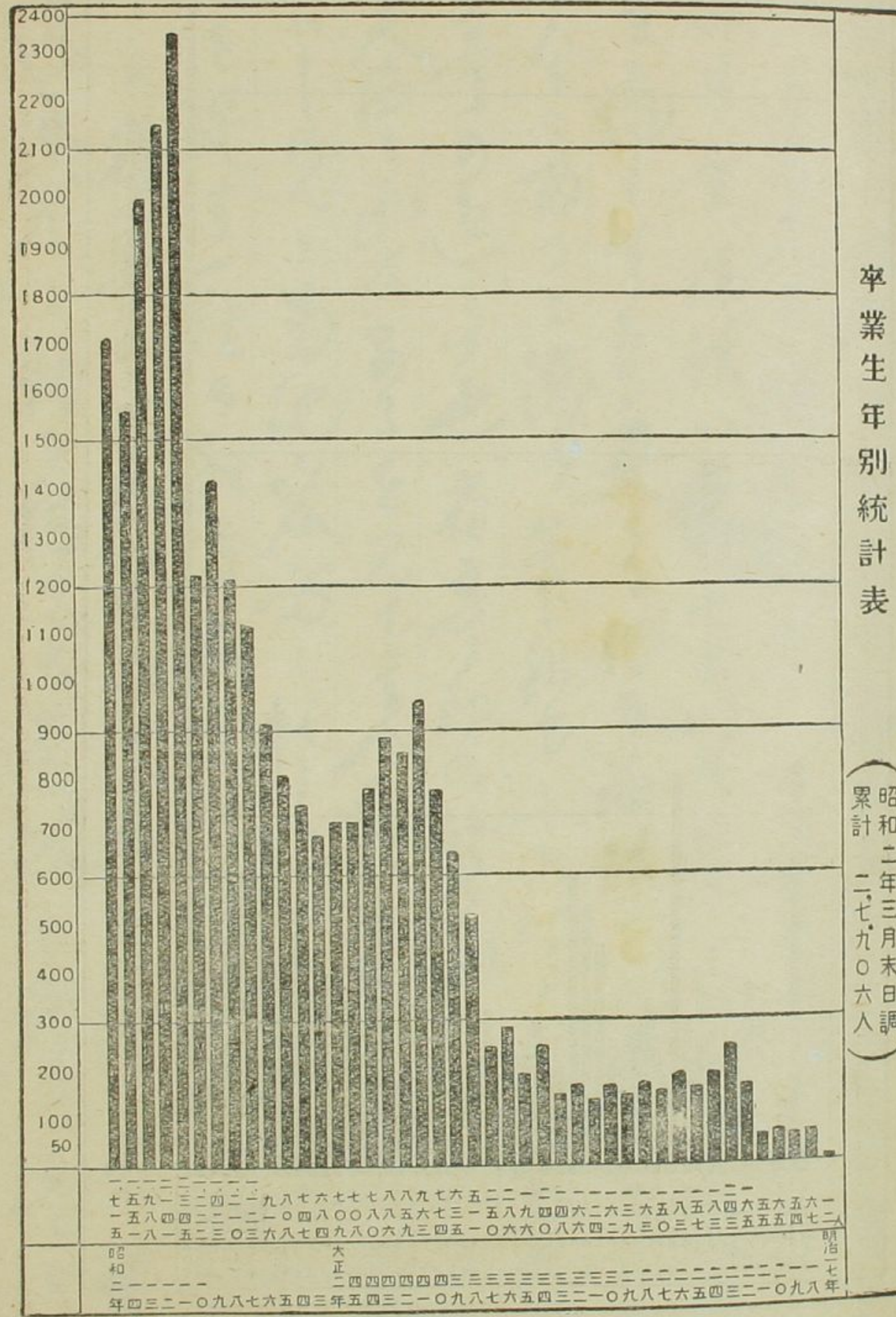
以上

いふから多の成りて任かすことまじし。此令早大の創立と略りの目的を定むるに依つて設けられたる初めは今も無つたの比類自分から今も如きものも今日も及んがゐる。紙依の早大校友の皆に此令今日一日の務をなしたるのがある。

○此秋亦も早大の出版部の新築が落成するのの創立と關係ある事より連続的の此部の根柢は其のつとめある事ゆゑと今を境の外にや更に行打の二人の功名を表彰するに免紙依今日換くするをあるさんと計畫す

自分誠し、とてあきらまぬ處由に置かへしと主
張し、侯の志あり、満々、婦人、應接家の暖爐の
一方、今飾桐を、重きある所、これを死せしむ
いふ、朝令に先復の心、今を、河あて、死ん
ハ、殆どあり、とも云、いふ、可成、死、決し、比
し、と、自分、思、く、社子、盜、の、婦、人、像、も、あ、ん、い
雨、ざ、ら、い、日、ざ、ら、い、何、を、さ、い、れ、く、し、き
國、を、さ、い、れ、く、い、何、を、さ、い、れ、く、し、き、奥
か、く、婦、人、の、妝、粧、の、能、か、く、さ、く、も、能、り、の
深、み、存、こ、せ、ぬ、方、と、思、ひ、い、は、朝、令、に、え、ま、ら、ぬ
せ、ら、し、を、目、的、と、し、て、心、像、し、く、産、も、あ、ん、い
由、美、意、の、ま、る、く、も、在、ら、る、趣、も、あ、り、終、に

と、や、い、は、置、く、こ、と、い、う、た、の、い、ふ、誠、也、の、中、寸
ふ、た、て、い、不、動、山、と、い、ふ、一、丘、を、為、す、と、更、に、ま
ふ、高、き、不、あ、り、を、こ、を、教、正、理、し、て、置、か、ん、ら、か、え
と、其、の、ま、と、決、す、可、的、に、松、魂、殿、を、移、す、不
七、拾、令、の、上、決、す、不、動、山、に、あ、る、銅、の、大、快、刀、
ハ、宮、中、に、松、魂、殿、附、り、し、て、移、す、方、と、い、ふ、也、
一、し、
七月十三日記
○女、婿、守、松、健、十、六、年、振、を、出、糸、程、々、の、物、を、
を、振、ら、す、ヤ、ハ、印、杖、四、款、あ、り、玉、に、似、て、壽、山、と、
亦、好、貨、と、な、す、中、寸、も、同、法、一、款、白、毛、も、
亦、好、貨、と、な、す、凍、石、と、為、す、古、敢、て、不、可、ら、す、
僕、印、を、愛、し、直、杖、を、振、ら、す、も、り、年、獲、ら、ぬ、こ、と



縦一桁一人の字を並べると多量の集材の

得ること、杉本楓湖と藤野親善の書物と云ふこと
画の民族の因しからんこと、楓湖と金島を托さ
るを特筆して訪ねてゐるんが、白書一冊と
秘訣家やの日記者等、保れりし笑話子
どもを綴りしと責を責む
○楠瀬日年、一、贈んを、印材、利ある
七月十四日記



と身刺とあり、関傍一春城の印今日奏刀、
冷翹の二字余の特に撰んじ囑しる所、冷翹、

吾が欲しし而も漸く所、此の二字兼し吾が箴也
昨夕海暑、極くす、此際、用ある由、六吾、し自
を免ふ

七月十六日記

○支那と昨今行ハキ、主義曰く三民主義、三民
と曰く民族曰く民権曰く民政、えんもと故、又
の二條、一と云ふ、其の解釋、區々ありとも、民族
ハ民族自決の意もあり、民権ハ専政ニ及ぶす
こと、其の民政ハ、民生の安定を意味する事あり
其の四る、其の政を以て、其の勢ありといふ、久
しく、其の政を以て、其の勢ありといふ、久
えんもと云ふ事あり

今、宣傳の世の中、其の結、其の宣傳の意

者の名を存す又末尾「校賃二十文」摺
賃十五文」と原版の通り「利すえ和丹
刻の助縁者の由る」清韓の花あり
関白忠榮左大臣内大臣等の花あり

一牛科撮要

横本 一冊

夏保正 提陽三宅人柳林子の序
あり、唐馬の由る牛の給多く收め
あり、附録に騾科と藪す注ハす
し四五段あり

一本草詩箋

四冊

吳郡東樵朱鈴の著す所撰陸西子雲
山蔣濤の序あり、

注あり注火注土注金注石注鹵石
午卯 別あり山草注方石隠者
本草注草注木注花注朱注
果注味注香木注木注灌木注花
注魚注諸注等注今注詩箋
収山詩箋短一冊あり

一沈潜世説

五冊

寛政八年刊 芭蕉の著す其の
下の色をを過半分り方き

この書は著者であるの序のついで
ハ七と正八人物志と名づけしものと
いふ揮毫あり北政少とある也

一 美佐古

二冊

雷六軒奉勅の句をあるの名人の撰
びたるを判者自身の書と刻しある
ものも数あり初編の序に記す物
皆是物言大印^{卓也}あり

一 燻乾

四冊

同治年間京山本子元大初の著す

十二

所生物の変態百換の内おのつ
から燻乾とよきものを本文とし傍らに
細心考証を施す本草の資料と
益あるもの也

一 新校宋收傷寒論

今 二冊

漢法行のうに日宋版を西復刻し
この邦に大十二種あり此本袖
珍本とす通し二十卷、天保甲辰
筑後編纂元照の校する所丹波
元堅の序あり書は乃ちや島知延
とす、今不用要の出るらん書史

の志料として架中、缺如を許さ
いふこと也

七月十八日記

○炎暑為客、無く無聊の折柄、保原夢舟(肉三)よ
り近海を空りて、夢舟前島、鴻爪の友人より
歎ハ秩乃、雙蝶、余前島の侍を乞ふとあり
夢舟をゆめと再四、夢舟交あり、此酒若
中戒酒二十章、余と酒する所、似たり、而も余
律不結、和陶疑古九首、略々自家の性、懸
を悉すとのあり、酒の後、茲に收めて存すと
いふ

七月十八日記

戒酒二十章 小引

夢舟周草

丁卯歳首、養病湘南、偶讀陶淵明飲酒廿章、輒次
其韻、命名戒酒、想儀、狄流毒、醉殺人、間不知危、幾
歐人早覺、其非所在、無不有禁、飲制酒之會、如米
國布嚴令、以為國禁、可謂達矣、如我邦、衆醉酖酒、
未有獨醒者、今而不改、鐵衰亡之漸、可懼、可慎、聊
摠憂懷、問大方

其一

李白酖狂飲、醉魂任所之、騎螭隨煙霧、縹緲欲仙時、臨流
掬明月、身終殄于茲、好死不真性、愛生誰復疑、世上酖酒

人欺已不自持

其二

杜老不嗜酒，長飢飯顆山。雖賦醉歌行，忠信重立言。艱難供奉際，一飽躬耕年。吟苦太瘦生，此心永可傳。

其三

折腰不可耐，歸田養性情。生前一杯酒，不問千載名。幽意隨所愜，三徑樂餘生。曲肱水可飲，濠濮魚不驚。錯大回窮節，悠悠自然成。

其四

莊周南華夢，化成蝴蝶飛。栩栩度芳草，蘧々搖落悲。傳神

從黃老，寄傲漆園依。沈洋恣素抱，風懷淡而歸。一生畏牲犧，人間憐榮衰。固辭楚王聘，鐵石心不違。

其五

遯跡市井裏，而猷市聲喧。負病每閉戶，煙霞癖無偏。卧遊千里目，咫尺對江山。溪雲斜暉外，牧笛破寂還。巨匠通靈筆，慘澹不可言。

其六

物情日喧逐，顛倒非与是。結黨相擠排，引類互誹毀。弁論多語穿，文章虛偽爾。襪襪趨權門，暮夜戲羅綺。

其七

亭亭凌雲竹，相於伴蘭英。君子賞高節，長共歲寒情。貞幹勁而直，檀欒虛心傾。積雪報平安，隨風聞鳳鳴。托根幽窓下，訂盟兩聊生。

其八

南湘梅千樹，玲瓏冰玉姿。東風孕春信，先到竹外枝。寒苔埋古徑，槎枒老幹奇。谷鶯舌猶澁，喬遷欲有為。日夕憇溪亭，冷心不可羈。

其九

海嶠圍三面，紆曲微徑開。避寒賃茅屋，攤書遺素懷。起卧共隨意，爨炊時或乖。幸得親隣舍，可以慰幽栖。燕翅尋日

壘鴻爪，印春泥。忽逢杵臼友，披襟意先諧。我本江海客，煙波意不迷。扁舟棹明月，從今更幾回。

其十

昔遊四方志，淹留終一隅。青袍年々色，白髮冉冉途。我齡已八十，為鳥兔所驅。辛苦營一飽，積漸聊有餘。向平願未畢，難卜澗邊居。

其十一

今人漫競新，昔人依古道。我有養生方，守拙至于老。吸瀝不喪神，相豈耻枯槁。今世重駐顏，美貌隨已好。擺落非石思，健康寔為寶。我從丁令威，羽化語華表。

其十二

越鳥集南樹，代馬走北時。中原逐鹿急，猛士死不辭。自建
民國來，十六年于茲。當路屢豹變，兜鍪相猜疑。閱檣彌樹
烈，心兵互相欺。焉知安國計，當須鼎立之。

其十三

西隣古桃源，宇寰一種境。依々戀紅霞，懵々夢未醒。鎖津
斷交通，連烽嚴管領。尚方斬馬刀，戰血滴鋒穎。風塵捲赤
縣，赤燄赤炳々。

其十四

在昔好聲樂，鄉侶逐期至。促声四坐驚，漫撚我心醉。父老

頻惡評，不入我胸次。却加中腸熱，自重以為貴。去々百年
中，無能一有味。

其十五

稅吏催租急，去年賣余宅。昔曾拓荒蕪，畝畝辛苦跡。加齡
及八十，二紀將至百。勞加鷄皮皺，功勒鶴鬢白。天地一逆
旅，余宅不足惜。

其十六

禮樂資緝睦，倫道因明經。古風終蕪蔓，新聲郢調成。縞衣
及綦裳，相抱語深更。東天已微白，朝雉早集庭。覆翼声低
々，求啄共和鳴。淫哇無上下，奈何鷄奔情。

其十七

畫蘭纈珮紉，描菊傲秋風。我有禿頭筆，揮向露叢中。淡々
霜下傑，同調意氣通。養人翠袖薄，愁眉彎如弓。

其十八

衆醉壓世久，獨醒不可得。古來素心人，脫然自不惑。復信
金石堅，負責無不塞。跼蹐生死間，孰與能報國。知者敢不
言，一覺付默々。

其十九

劉伶頌酒德，青蓮棄祿仕。二公共英雄，欺人又欺已。欺已
死爲榮，欺人醒是耻。陶公獨知謬，惺忪歸田里。鄉愿德之

賊，昭々有綱紀。醉狂俗中惡，憎騰不得止。寄語世上人，酒德
不可恃。

其二十

大運自循還，推移不違真。各國各異俗，先覺歸化淳。萬邦
有憲典，鼎鼎日競新。底事醉鄉客，狂暴於狂秦。破產轉溝
壑，倒鋒逃戰塵。没々逞不庭，碌々日不勤。列邦禁酒會，徃
々見情親。快哉米國禁，足以爲梁津。渴者如盜飲，不假覆
面中。過誤勿憚改，行矣戒醉人。

和陶擬古九首并小引

夢舟周草

昔東坡先生在廣陵和淵明飲酒二十首及謫僭
耳終和了全陶詩延及歸去來辭古來和陶之什
莫過坡翁予類齡八秩常愛讀陶詩屬日有和飲
酒二十爰亦和擬古九首他日天若假餘齡夫或
有坡公之傲驪乎

其一

青々門前草，蔚々園中柳。桑弧是男兒，敢言淹留久。辭家
前途遙，中路逢故友。淡々平生交，心醉非酌酒。剔燈抒契
濶，促膝論抱負。金石共切磋，意氣傾純厚。遂初如不成，一

死復何有、

其二

家學有遺訓，立志念始終。當時尊攘議，方伯頻從戎。紛々
櫻田雪，傑士飛劔雄。磅磚忠義氣，勃然興王風。西學資閱
化，文明寔無窮。始繙蟹行書，沈潛螢雪中。

其三

游子如轉蓬，隨風到海隅。少壯修學苦，曲折意不舒。親朋
一二輩，相結卜茅廬。都門桂玉貴，橫溝且僑居。豈無望洋
歎，鼓刀拓榛蕪。孜孜勉格物，撥糴期廓如。

其四

危嶠自然壘，迢遞控鴻荒。昔聞將軍府，今見讚佛堂。東西指顧中，南北何茫茫。古時姦傑士，骨肉爭此場。九代十三世，相與散北邙。觸髅與折鐵，遺墟有低昂。蕭々親王廟，禘祀巖尚方。一拜千行淚，憤激使人傷。

其五

國步艱難際，忠孝難兩完。東藩多義士，慷慨髮衝冠。正名尚大義，忠節暨二顏。英魂招不返，茫茫白雲間。此道今如何，舉世溺異端。我有焦尾桐，慨然試一彈。一和雲中鶴，再和荆栖鸞。願卧美人傍，長此共歲寒。

其六

雲構何巍々，群鴉朝集茲。啞々盡日噪，歛翼昏暮時。去入狹斜巷，飛觴酒如淄。傲遊徹夜飲，忽引大方疑。一波起萬波，流言多詭辭。追隨逆潮勢，不耻陋哉思。欺已常自若，不知天難欺。天網自恢々，疎而不漏之。寄言囹圄客，記否賢詩。

其七

三才維鴻基，六合不失和。碩鼠食我黍，民衆若悲歎。產業非不興，頗患輸糴多。智者守儉素，愚者驕奢華。國債五十億，今將當如何。

其八

丈夫萬里志、孤劍四方遊、倣裝辭親故、樓船向五州、遠乘
貿易風、碧海度環流、上陸入城市、徙倚望山邱、目眩文化
盛、觀風東西周、論文照肝膽、同氣隨處求、

其九

驪龍頷下珠、探淵茲始採、揚輝照連城、回觀一朝改、不待
月中天、大羅闕於海、我老身神衰、誰云藏器待、餘光在草
堂、索居復何悔、

○風土が人の氣風に關係を及ぼすことの大なる言ふま
じかまゝが、支那の長江一帯の人氣の如き、確々
川の影の音を聞きしを、此川も濁流がある、極
七度く長さの冷き、故に生れが低いから流るゝ
緩慢である、さうして氾濫することと、天地満
目皆水、さうすること出来ぬ、到底人力を以
つてたゞのちを、住民の運命と、歸るべきを
、斯る事の人心を、緩慢する、濁流の多きものや、
、性急果斷の氣、氣の冷、對し、缺けをみて、不得要
、欲である、日本人は、高差の多い河を、元河の多き、
澄徹の底を、見る、さうして、多き、泡つて人の性、が
性急、さうして、得ぬ、果決、さうして、潔、さうして、

日本人の四洲上のことと無関心のよるもの、島田の故
ふから四洲のことか一向にわらぬ、米穀のやうな売の
のここといふん関心をもたぬかある。支那へ出かけるもの
同胞が非常の難儀をして内地に居る同胞をす
るものもある、支那へ行くものと難儀と戦ひ大いなる
苦のあるものがある、皇軍も政府もその
切實を勤することもある、こゝろを冷淡な四
民がハツクとさうもあつたから、支那の戦線
もさうもあつた、細い線である。
田中内閣の支那出兵は、兎角の議論があつた外
交上の失敗とせられてゐる。支那の内訌、日本出兵
を待構ひてゐる一往の煽動的ブローカーが

ある、コンチネンタルとキリチキリは日本に不利な後
の悪策をやむ。日貨排斥のことがあつた、これは
日貨排斥の如く日本の中へも損害を及ぼす、莫
大なるものがある、さうする利害を考へず、無暗に兵
を出して先方の感情を害し、敵艦とさうもの、必竟
日本が打つ果的である、日本海の一徹は、無暗に海
をえて、武断の交戦に出ひ、折角感情を駐和
のりを打ち毀すもの、無策と云へるを得ぬ、兵を
出すものも海軍の陸軍隊を働かせる方法も
あつた、さういふ、高橋兵を出す代り、金を握り持
いて兵の易いもの、揚攻も無いてゐる、支那
に對しては、北滿洲の方がよゝゝ利くのである、日貨

排斥するから来る大損害を思ふと、夷而美の
筆を詩も教す位は何んじやないのぢやあ。

日本人の澄み切つたおまゝの如く心持が玲瓏び
何んか七見、すいゝゝゝ。そこは回ると支那人の頭
の複雑な者と表裏がある。表向のふことと内心と
は違つてゐる。到唐外面から心を覗ふことか出来
ない。二と二を合すんは四とさる教理の日本人がど
まむも準據する尺度があるが支那人の教理はそ
九といふ二二が五とさつたり六とさつたりする。そ
こは彼等の遊ぶ餘地がある。日本人真向から
行くが彼等の側面から行つたら其側面から行つ
たらさう。横車を押すやうに彼等の最を得

言とする所である。

支那の文字の四と云はれてゐるが、其字もあつた
数の四の七令あるやうに全く文字目である。宣傳用
の文字を誤り得るもの或人もさういふ。さういふ
どうさう評が流言蜚語が地方の教をさす
くは直ち子傳はさういふ。四か度ろく且つ交るが
開けさういふ。日本さういふ。宣傳の届くといふ。さ
と七はさういふ。支那人のめる。速信からさういふ。さ
粗末なせぬ。あかし目さういふ。さういふ。さ
を大切なせぬ。新らさういふ。さういふ。さ
入りの書物と煙中に入つて段を取らぬ。其
供しあつても惜しむか。

○董物の難が重篤と因し働きを怠るとか
胃酸過多症に特効があると云はん、此頃
上山君の之れを先取りし錠剤を心づいたを友人
が試みる用ひに試を少くもせらるるより利くと云
ふてあるをよ坂上の如く注射を施す為め
来郎一とあら、やへて見ると、董物の難がある
特に致能があると思へる、董物の難の成る
くことあるが、それ以上効はる、全く難の成る
よるの、あると云ふは、まじい此の薬、名も命
いそいそ

○自今が改上から七八年受けとる、ワクチン注
射と此と改上の後、所入らると、ワクチン注

痘をワクレチンと同一の源から来るとか
羅倫のワツカと云ふうだ、牛痘を移し植
するの、全く性は異つてあるけん、ワクレ
チンとワクレチンと云ふ、聊かゆめ、ワクレチンと云ふ
と、そのつて、自分も、今迄はワクレチンと云ふ
あつても、思つて、今、誤つて、おれ、改
上の注射の、英國、ライト氏、此人
の、瑞典の出身であるとか
○昔、橋本半蔵の、人足、岩御者、雲助と
名つて、しよか、あつた、東海道、雨、勿論、各所の、街
道、助、あつた、雲助と、誰んか、名を、命し、と、あ
身、う、横鼻、禪、の外、片布、も、纏、へ、す、赤、裸、び

七月廿日記

街道を我々の顔に横行し、彼等が雲に宿
り霞を吸ふて、定住を以て無つて、亦彼等の
行動も軽快の雲の出没自在に、壁をへきこよ
ぶあつて、彼等が雲助の名のあつても、偶に互
今、雲助といふ名を知るよふか少くも、見れば、殊
に少くもあつて、かゝる交通不便の舊時よりハ
減るや、トウワウの代用にあつて、かゝる、缺き難い
棧貫びあつても、三六のやうか、こやつさうく、繁
悍に路法に慣れ、喧嘩半か上手で、酒銭の厚
薄に即時、器工七やんハサウオム、じもやつて、
氣の弱いの旅、安の世のこゝ、四月威を感して
閉はさせん、殊に、殊に、婦人を伴ふ旅、安の、随分、迷

惑を以てし、のがある、自今が初め、の況、八年、出京し
北道中、倉津街道より之のを見れば、其後、四五年
采根と云く、時をも見れば、北道、多分、北族の最
後の名残にあつて、あつて、高時、重なる、市色の
立地の、孝居るもの、軒先より、北等、裸人が群を
あつて、おの、旅行の、林貫ハ、三坊、
被えれば、よのがある、偶に、旅話、
故人、身宮、三昧が、雲助を、
聴いた、実話が、
九月、
七月、



雲助

三味道人

この稿は故人が生前余に贈られしもの、久しく篋底に藏しありしを取出で、こゝに登載せるなり。(鳶魚)

世は旅行季節となりたる今日に當りて、幕政時代に於ける五十三次の状況を語るも、亦多少の興味なきにあらざるべし。

されど僕、古物なりと雖も、天保にあらざれば、五十年の昔を自撃したるにあらす。我が年頃召仕へる老僕長吉は、壯年の頃、道中人足廻しと云ふ事を勤めたるものなり。今其の語る所によりて、僅に其の一斑を記するのみ。

長吉在焉。幕政時代五十三次の状況、僅に傳ふべし。渠も亦或意味に於て微すべき文獻なる哉。
いでや今の華族の祖先たる所謂大名様なる一種族が其の満幅の光彩を放ちて、五十三次を旅行したる有様、はた又一本有竹杖千里可横行と自稱したる雲助の生涯など、甚だ意外にして亦いかに滑稽なるかを見よ。

江戸へ参勤交代の下り上りに、大名が多人數をつれて道中するに付ては、荷物も澤山なるのであるから、従つて荷持の人足が澤山要る。ソコで宿驛には此人足の事を扱ふ役所がある、これを問屋場といふ。すなはちこの問屋場で馬でも駕籠でも皆扱ふのだ。トコロが昔の専制時代であるから、馬を出させても、駕籠を出させても、賃金を満足にはくれない。御帳面と云つて、一種切詰な相場しか拂はないのだ。乗唐尻といへば馬に人が一人乗るのである。これが文久慶應の頃、小田原から箱根を越して三島まで、普通一貫五百文位の相場であるのに拘らず、御帳面

では七百文である。加之宿屋へ泊つても、やはり其の割合にしか旅籠賃をくれぬのであるから、勢ひ多大の足まへをしなければならぬ。従つて宿驛ばかりでは到底負擔に堪へない、ソコで宿驛には、必ず助郷といふ者が附屬されてある。すなはち近在の郷村だ。助郷に三種ある。「定助場」「加助場」「カスミ場」だ。定助と云ふのは宿驛に極密接した郷村、加助場はこれより稍遠き郷村、カスミといふは、カスンで見えないといふ意味から付けたものであるから五里十里の遠き、時としては十五里にも及ぶ事がある。三助郷から宿驛を助けて馬人足も出せば、入費の不、足をも満足で、御無理御尤の御大名様を滞りなく通行させる。されば昔の道中筋町村たるものは随分困難なものであつた。

問屋場には宿役人をはじめ、助郷から賄役といふものが夫々出張して詰て居る。それで圓滑に人足を廻すのであるから、時によつては人足が足りない。處へ川づかへでもあつて、不時に幾頭

もお通りが落合ふと、サアどうしても人足が引張り足りない。足りないからといつて、出さなければ先方は大名であるから承知をしない。自然大々名を先にして小大名をば後廻しにするのであるが、小大名だからといつて、人足を出さないでは承知するものでない。といつて宿に人足は一人も居ない。どうにもかうにも納りがつかないから、斯ういふ場合には、問屋場の役人總逃けに逃げるのだ。これを「問屋場が明く」といふ。

問屋場の床は非常に高い、大抵普通の人の胸以上あつたものだ。これは侍が怒つて來ても、容易に上られない爲に拵へたものだ。それでも早業に達した侍は、飛上つて來て抜刀などして困らせるのがある。嚇かしばかりなら仔細はないが、何としても慮外者斬棄の時代だから、ほんたうに斬らないともいはれぬ。中々以て危険であるから、問屋場によつては、床下が芝居の奈落のやうに拵へてあつて、危険の場合には、宿役人がスツボンで消えるなど、

いふもあつた。この仕掛には随分驚かされた侍も多からう。

宿役人の中に、明荷賄ひといふ掛りがある。これは荷物について、人足の監督をする役である。なぜかういふ役が必要であるかといふに、人足が途中で逃げることもある。賃金を受取ると直に二割丁半といふ賭博ができる。賭博といふやつが、屹度勝つときままつて居れば甚だ都合がよいが、大抵は負けるに極つてゐる。そこで負けたやつは、そこを逃げてまた外へ行つて賃金を受取る。斯ういふ風に二箇所からも三箇所からも賃錢を受取つて、すでに取られてしまつた後で、體は只た一つであるから、どうにもかうにも納りがつかない。そこで焼腹半分、何處へか逃げて行つてしまふ。これすなはち明荷だ。その尻拭ひをするがすなはち明荷賄ひの任である。併しなほ無責任の雲助だといつて、明荷をしたやつを打棄ておいては、取締りがつかない。そこでかういふやつを見つげ出すと、棒縛りと云ふ事にして、これを罰する。これは

十字架形の棒へ素裸にして轆鼻禪まで取つて縛り付け、宿中を引廻しにして、最後に宿はづれで、片髪そいで追放するのだ。しかし雲助等は、この位の事をば何とも思はぬ。彼等は先天的に素裸で、長持を擔いで居る奴等だから何とも思はないのも道理だ。(雲助が賭博にまけて、取られるものが無くなると轆鼻禪をかける。この轆鼻禪が随分非常な價に評價されてあつて、其の借を償ふまでは、轆鼻禪をしめる事が出来ない規約ださうだ)

明荷賄ひの外に又「シクジリ役人」といふものがある。これは名の如く、シクジリのあつた時に詫をするのが職掌だ。或は荷物に間違があつたとか、宿屋で倉忽をしたとか、皆このシクジリ役人の引受けである。甲の宿でシクジリがあると乙の宿まで附て行て詫をする。乙の宿ですまなければ、丙の宿まで附て行く。斯の如く、二日でも三日でも、詫のすむまでは附て行くのであるから、頗る嫌な役でありさうなものだが、役徳があつて頗る旨い役なの

だ。何故なれば大名に付いて行く間は、幾日でも日當を取つて、おまけに斯ういふ事で入費が掛つたの、どういふ事で金を費つたのと、嘘八百を書きだして、宿から金を取る。ダカラこの役人はシクジリが無いと飯が食へぬ。落語家は浮世のあらで飯を食ふと云ふが、シクジリ役人は宿場のシクジリで飯を食ふと云ふべしだ。

シクジリ役人の最大得意は公家衆である。お公家様のお通り程シクジリの多いのではないが、又御公家様程解りのよい者はない。日光禮拜使を始め、御公家様の道中は、すべて宿屋から人足まで皆無代だ。それで長持を二十棹も三十棹も持て来る。みなカラ長持である。公家のカラ長持といつて有名なものだ。凡そ長持をかつぐには、五貫目に付て人足一人といふ定めであるが、カラ長持の事だから、五貫目も三貫目も有つたものではない。人足が二人ありさへすれば、かつげるのであるのに、この軽い長持へ五人持十人持など、札を付けて来る。何故そんな札をつける

かと云ふに、實際かつぐ二人の外は、皆代金で納めさせるのだ。

すべて宿驛をいぢめ、宿屋をいぢめ、茶屋をいぢめ、飯へ草芥が入つたなどと有らぬ事を言ひかけては、シクジリをさせ、アヤマリに行くつと錢を出させる。ひどくやかましい事を云ふけれど、錢さへやれば直ぐにすむ。宿驛の方でも先刻承知の事であるから、この長持は十人持などといふと、それは旦那あんまりひどい、五人にまけて下さい。いやさうは負けられない、八人出せ、八人がざり／＼の處だ。そんならようございます、正人足で上げませう、問屋場に人足が餘つて居ります、など、こちらからも掛引をいふ。スルト向ふからグツト下手に出て、マアさう怒つてくれば困る。では我の方でももう少し負けるから、貴様の方でももう少し我慢してくれ、など、いふのだ。それから江戸へ下る。宿屋へは宿らせない。新に家を建て、入れる。スルト御用相済でイザ御上りといふ時には、其の家に附屬した家財什器残らず例の

ラ長持へつめて持つて歸る。何でも澤庵の押石まで入れて行くといふ事だ。ソコデ歸りには、長持が殊の外重たくなる。ソラ又人足の論がむづかしい。斯ういふ風であるから、公家は一度江戸へ下ると、一身代出来るといふ事だ。ソコデ其の供に来る人間も、賃錢をもらふのではなくて、若干づゝかの株金を納めて来るので、それが又競争で私はいくら出します、イヤ此方ではいくら出しますから、何卒御召し連れ下さい、などとせり上り、高金を納めるといふ事である。

以上は、道中の人足を雇つて通る者の話であるが、外にまた「足ツキ」と云ふのがある。これは大々名または有福の大名が、江戸から國許まで、雇ひきりで人足を連れて行くのである。これはまた強勢なものだ。江戸の町人に入入れの元締と云ふがあつて、何れも出入大名から扶持をもらつてゐる。芝の政田屋、三河町の相政などと云ふのがそれだ。この元締が受負て、何百人でも人足を入れるのであるが、これがす

べて本相場で賃錢が下るので、其の入用は莫大なものである。加之出立前に、江戸屋敷に於て「カケマへ」と云ふ事がある。これは長持の貫目を計る事だ。

トコロが其の長持が滅法重い。「お金のタテ」「御薬のタテ」「御疊のタテ」など、云ふのは、就中重い。次手ながら大名は「二疊臺」と云つて、疊を二疊持て旅行したものださうだ。これは宿驛で本陣へ宿つた時、座敷の疊の上へ其の二疊を重ねて敷て寝る。其の疊たるや、堅くて堅くて、萬一悪者が有つて、床下から鎗などで突ても、到底突通す事の出来ない様にこしらへてある。こんな堅い疊の入れである長持だから、重いのも道理だ。その重い長持を尙更に重くかける。どうして重くかけるかと云ふに、「カケコエ」の棒といつて、別製の棒がある。

棒の中心を剉抜て、中へ鉛がつぎこんである。かういふ棒でかけるのだから、五十貫目の長持が百貫目にもかゝる。時としては、袂越に長持の横腹へ錐を通して、容易に上らぬやうに工ん

だものださうだ。これ皆賃錢を多くせしめる爲だ。併しながらいくら賃錢より重くかけても、見分の役人が、それはあんまり重過ぎるとはいはない。それは加古川本藏的に伴内殿の袂の内へ一品通はせて有るからである。凡そ九匁のシキノミ玉（鐵砲玉）三千で、一長持と決つて居る。九匁を三千だから、三九二十七貫目とは小學校の子供の算術でも分つてゐる計算であるのに、これを百貫目とかけるのが定めだ。斯ういふ風であるから、所謂元締なるもの利益は莫大なものだ。殊に道中へ出ても、夜に入つて何里歩かせたとか、朝早立だとかいふと、「夜増し」「朝増し」と云つて提灯をつけた時間だけ増しを取る。其の外「山増し」「川増し」何につけかにつけブツタクルのであるから、随分まうかる。ソコデこの元締の暮しといふものは、非常に贅澤を極めて居たものだ。

元締は「シタ馬」と「小差」と云ふ二種の雇人を使用してゐる。この二人がすなはち道中人足の宰領に出るので。

「シタ馬」の職掌は人足の世話焼である。長持をかつぐ人足は、一里ごとに飯を喰ふ。今も道中の人力車の、立場さへあれば飯を喰ふと同じ事だ。トコロが百人も二百人も喰ふのであるから長持が来てから飯を盛る様では、到底間にあはない。勿論立つて居て喰ふのだ。ソコデこの「シタ馬」が先へ駈けぬけて行つて、人数だけ飯を盛らせる。盛仕舞ふか盛仕舞はぬ内に長持が来る。直ぐ長持を下るす世話をして、喰はせるといふ順序だ。飯を盛らせるに茶屋も宿々に二軒か三軒定見世が有つて、普通の茶屋では、長持の飯は盛らない。長持茶屋の事を貫目立場と云ふ。どの宿の貫目立場は何處だと云ふ事を知らぬやうな事では、シタ馬は動まらない。また長持の上げ下しを差圖するのにも、實際棒を肩にあてたものでなければ、忽ち人足共から侮りを受けるから、シタ馬は人足から上るのである。

小差は一名「錢クレ」と云ふ。これがまたむづかしい役だ。古渡唐棧の著

附、脚絆、草鞋、一本差と云ふ一寸幅
隨院長兵衛の様なこしらへで、人足に
附いて歩き、町場(元締)から金を受
け取つて、宿の拂ひから、髪結錢、落
紙まで、人足に關する事は一切賄をす
るのである。凡そ人足といふものは、
雲助である。皆裸で来るのであるから、
何から何まで賄つてやらなければなら
ない。宿へ着く、飯がすんで湯に入れ
る、と、直に髪結をよんで何人づつか
髪を結はせる。一人に一枚づつ落紙を
渡してやる、と云ふわけだ。随分世話
の焼けたものだ。髪を結ふと云つても、
大勢であるから、一晩や二晩では結ひ
切らない。順番を定めて、毎晩の泊り
で結はせるのであるから、一晩でも髪
結をよばない晩はない。

併し江戸から連れて来た人足を廻す
のは、云はゞ手人であるから、面倒な
だけで別に難かしい事はないが、道中
の人足に酒手をくれて歩くのがむづか
しい。手人足を連れて居るのであるか
ら、何も道中人足に酒手をくれる必要
は無い様なものであるが、さういかな
い。手人足を連れて来て、道中の人足
を遣はない代り、所謂渡り錢を拂ふの
だ。これが即ち「錢クレ」の本職で、
甚だ難かしい仕事だ。
道中人足に「地人」「宿人足」「出
馬」の三種があつて、其の種類によつ
て、それ／＼酒手の高がちがふ。地人
と云ふのは助郷から出る百姓だ。出馬
と云ふのは、朝ブラリと馬を引いて出
て来るやつで、これには百姓もあれば、
宿の者もある。宿人足といふのは即ち
雲助で、こいつが甚だ難物だ。加之宿
の状況町場の遠近によつて酒手の高が
ちがふ。宿の状況とは如何なる事かと
問へば、甲の宿の町場には山があると
か、乙の宿の町場には川があると、
すべて難場のある處には、顔の好い雲
助が居るのであるから、酒手が高い。
たとへば、箱根山の如き難場に住む雲
助は、東海道中第一の顔であるから、
至つて酒手が高い。この町場の難易と
次の宿までの遠近、雲助の顔の好しあ
しを見分けるのが甚だ困難な仕事だ。
併し乍らこの團體へくれる物花は未だ

／＼さのみ困難ではない。すでに團體
でもらつた上に、また個人でブラリと
もらひに来るやつが難中の至難物だ。
親方どうぞ一升ぶりやつておくんなさ
い、と云つて来るやつがある。一升ぶ
りと云へば二百文だ。此奴は何もむづ
かしい事はない。黙つてもらひに来た
やつが甚だいけない。其奴の顔を見分
けてくれてやらないと、小差でも元締
でも、忽ち頭へ拳固が御見舞申すので
あるから、どうでも道中を度々して、
木曾でも東海道でも、有ると有る程の
雲助の顔を熟知して居るものでなけれ
ば、満足にゼニクレの役は勤らない。
(つゞく)

最期の誓願寺

平井権八が鈴か森の刑場で、最期の鈴の
手を止めて、誓願寺を語つたと關東潔靈傳
にある、それを比翼塚由来記になると八重
梅を唄つたといふ、諸と加賀節、筆者の心
持ちも五六十年の間に替つて往く、事の眞
偽より先づ出處を考へたくなる。

〇丁の二面位女兒に侍りて新有の活動令を
を足るゝか此頃の例とありてみる、畫故と一杯飲
み活動の傍内い心地よく坐睡するることもある
煽る様、涼を納れし無我の境に入ることもある
めく新一の活動令をいを見て且つて感するひ
まの、動七すこと四、感きつけえることもある
、昨日の古着を、一割を、少年仇傳
の如技、感した。その仇傳は、ジャッキー、カ
ガことらふ、米國の十二才の仇傳と云くか、
まの行動が、女の、靈活が、小供さしい、
崎の、あつて、あつて、あつて、あつて、天
才と見るべき、この、あつて、あつて、あつて、
此の、あつて、あつて、あつて、あつて、

はへ取り總勘定

さすが淺草が大關格

深川では個人で五萬二十匹

- 二十日市内一せいに行はれた「はへりデー」の獲物の數(判明した分)は左の通り
- 千六百八十九匹
- 萬世橋署管内 七十四萬二百七十五匹
- 神田錦町署管内 四十三萬九千九百七十九匹
- 西神田署管内 八十三萬四千六百六十八匹
- 芝三田署管内 百廿九萬九千八百七十七匹
- 芝三田署管内 百廿九萬九千八百七十七匹
- 一升を一萬五千匹に換算して八十八万六千五百匹
- 淺草日本橋署管内 九十二萬八千六百六十二匹
- 淺草南元町署 八十九萬匹
- 淺草南橋署管内 百十七萬七千八百八十八匹
- 下谷中署管内 六十萬五千八百八十八匹

銀座研究會

署長さんや検事さん達が

犯罪と風教の對策

今度

宮城築地署長が中心となり、尾任竹判事や小谷少年保護司その他檢察、關係署長等が集まつ

て銀座研究會なるものを作り、十二日午後一時から築地署樓上にその第一回打合せを開く事になつた

この研究會は銀座に起り易い諸種の犯罪を事前に防止するに適當な方法を考究するのが本旨であるが、更に、進んでは將來銀座に集中する市民の激増に對する方策を立てやうとするものである

銀座を中心として發生する犯罪の種類は、さう多様であるが、つ

最も多いのは金錢強要、次は婦女誘拐、無錢飲食、詐偽、風俗擾亂、萬引、すり、傷害、その他

上流階級の人々や活動役者等の極度にけはくしい

服装 や行爲に對する風教上の重大な影響に對しても十分研究して對策を講ずるはずである

二十二日は研究會の組織や範圍について協議するので、會員には教育者や民間の人々も入れる事になるらしい

今朝の朝多々、右の朝のこ
とが出てゐる。甲術の結果
度、醜態をうけた中、艦を渡
てお決する。こと、本署
のや大改遷都の考案や
堀元デーの收獲や

銀座研究會といふことも、やがては、本署を拂ふべき
ことであるから、このまゝおめておく(七月廿二日)

○十月に入つて花者を受部さんと決して、お社の考
査を訪ねて、其の手配の打合をなす。二番母許の
圖書は、お店裝束、九令より、早稲田の出版部の
合、床三階、預けあり、其の由、納實の、おと、雨、
さう、宣傳用の、目録を、九月、入、り、作、物、を、
ハ、一、大、漫、画、の、圖書を、換、り、ゆ、て、元、格、を、
ニ、番、冊、全、部、を、一、時、受、部、す、る、こ、と、の、か、ら、お、
裁、量、を、一、お、店、に、任、す、べ、し、と、さ、す、も、或、る、程、お、
寺、の、一、類、を、運、ぶ、お、受、部、に、附、き、こ、の、も、あ、る、す、
お、師、の、お、ま、い、ら、う、う、う、日本、法、帳、の、お、ま、い、
價、廉

さういふものゝも、バラへゝゝゝすを、
合しと、若千の價に、よん、ハ、
も不可なり、
一以しといふも、
余の、
ハ、
お角、
賣、
仕、

書、
あ、
岩、

提出し、
次、
し、
十、
い、

余、
做、
す、
得、
し、
所、

笑す

七月廿二日記

○炎地を昇りて教東神田の上方屋に洋製品の烟
草箱あり、外部塗金漆を蓋に彩巻の首花
の紋あり、ポルトサイトらしき輸入のもの也、昔
これの金漆物ゑの如く、元々の木製をうへに
漆を塗入て仕りたるものなるを差向印遣として
書架を飾るものなり、即ち懸小、高木を
て入り、此利者を換す、素原随地、旭の山、若
和書、清書、須の二書あり、余此紙或る人、和
書のを編せんことを勸め、而して改に、此の刊
行あるを祝ふ、旅行の侶は、まじと懸小、外土

十二

此書の花の鵜軒游戯、多く、本家の
を載せし、鴻中、くろも、こゝも、婿、又天、本
平家物語、新村博士の著、又、あ、こゝも、あ、
漢、こゝも、こゝも、けん、こゝも、婿、あ、夏、日、の、無
聊と満すの具、文人とす、七月二十二日記
○此の書、二、字、の、印、山、田、山、田、の、愛、玩、の、よ





也、無名の款あり、善しす疑と定んて、るよの余の
 初する萬物一馬の印と比して多くあるを究く
 ず、或いは朝山陽の舊印と、未だ確を考す標
 を得ず、或いは山陽の北の二字の関治あるを
 え、このものの交渉あるを、正平 余の堀りたる
 画面に漢語を刻んことを以てす、玩賞の後

果せんことを約す

七月廿三日記

〇二海に在るは、後より彫るる種々の土産あり

十日の御誕生、御母ハ新典侍種子廿維姫友ハ
親行俊ハ曰ハ、橘を三位実父の女也、
春の天皇ハ遺腹ハ天皇の御母ハ新侍
川院雅子、贈友大臣ハ海原実光の女也、
御父ハお生ハ先き三ヶ月以前ハ御前
御入らる、嘉永四年七月十日宮六
の御時、有柳川宮、親王ハ御許
ありせらる、関東から御降嫁と
のハ御年十五の春也、あり也。

皇世降嫁の例ハ絶無也、
慶長十六年、徳川秀忠の女、和子ハ所謂、

福の院の女御と入内し、
川家から、
皇姫宮八十宮の七代将軍家継の御世、
所と御治定とあり、
徳川家
つ、降嫁の事、
外、

公武合体の政略結婚、
七代将軍の御世、
具視の建議が、

この問題とあるにけいも和宮の南は同日をた
孝の帝の女の皇女の二女あること代りの嫁せ
しめんとすか決意せん、帝は和宮に願ひし所
違憲があつたの事、和宮の兄君の一人あつたら
す、執念を思ひ終つて四の爲め、犠牲
とするの覚悟を定めんと。

大体が定まつても今で決意降嫁するに程々の面
倒があつた。帝宮に於ては幕府に對し攘
夷の實行を條件とせんと、降嫁の期に
就ては和宮の念願があつた。先帝十七
回忌を過ぎても、即ち一年後、関東に

下向ありしとの甲出あり、そのついで、その
西側を油断す、骨も折れた。係し幕府
は攘夷を折言し、下向の期に替へ、兄弟より
赤仲勢のあつて、幕府の望みがあるとい

徳川家茂 御降嫁の日 御慶途 十月二十日

十一月五日 江戸 御着、東海道に拍駈る。考
木越を御道一節とした。二十五日の間の初めの
御旅行、殊に御本本意の御旅行、左のお
歌、一班を御祝ひ、さることか出来
す。あつて、都路出、今日、東
路の旅

思ひきや雪井の袂ぬきかへて

うき、旅衣袖しほらと

旅衣ぬれまうけりわき行く

心も細き木曾のかけはし

旅を行く力と取りまき紅屋はの

人なつめしく馬んこをすめ

安茂は比叻家の出心十三代家定の後を継が
れ此婚儀の時十六年乃ち和宮と可憐に
つれ家定の末三人天璋院島津家
津島津家の養女として母家嫁かん
向せり家定は歿し和宮が降嫁後教

年より配偶を志せんは境遇たよく似て
ありぬし、まろく副殿の女徳川氏の末
路をよきまゝへ和宮に力添をせし切かあつれと
七云一。

和宮降嫁の南初大奥より種々の衝突があつれ
と云んてあるは、事あるはあつれと相違する
才一上方風と江戸風が異なるが、武家の風
と宮庭の風も異なる。降嫁の条件として
和宮の御生流は飽ちる名庭の命をいふは
いふことであるが、是れは、是れは、
初め和宮が天璋院に命をいふ時、天日

璋院ハ三ツ重姁の寸着園の上ニ坐シ下席
ニ着園ニ入リ又和宮ガ拜セズルニ云々
母ニ親あする礼ハあるが、皇家の息女ト
シテ泣かんばつウラハ相違ニ云々。此等
ハ京都ニ在リテハ聖上ハ逆鱗あるハ姑
婿破産ニ溺レシト云ハレテある。兎角皇
室から天璋院を元ハ何んせもさるハ隨
つて和宮ハ天璋院、贈えハ進物も唯
ハ天璋院ニとありテ敬を謝いておれ
ハ、尚ありテ母、對して對々あるべきニ
ハ京都の刃方ハ因縁的ニ對々あるハ
あり。

大奥ヨリ此物流の中と水戸流の中がある
之ハハ転つた。家茂ハ此物出であるから、
此物出の中ハ和名ハ徳姫と申すハ新名
自前の物であるのハ又、水戸流ハ慶長
を後の物申すハ此物出と申すハ此物出
から、此物出ハ和宮の血徳姫も祈つた、コシナ
暗河ハ和宮と天璋院との間を疎隔
シテ了分更せしめ、以テ相違するハ
聴取するハ和宮ハ天璋院を母と
敬せしめ、夫后ニ對してハ勿論、其
大ニ其等親和しと云ハレ、初めの内ハ江戸

第百一十九の巻。

和宮の徳操に就ては、法皇母の御母御母に在りて、
流があら。

和宮が入りにて、神の、元々閑息を窺つて居
たりと、すまじき時、渡御殿、天璋院と
御母と和宮が居りしに、踏石の上より
うきふちのふ、天璋院と和宮の草履を
あげて、将軍の揚げ下に置きてありしよ、
天璋院は先きを下りしんか、和宮は
之を見て、ポイント飛んび下りし、自分のを
捨てて、将軍のものを上げて、辞儀をさすつ

又

ルをうむ、まゝ入るに、又と教まらぬ。

将軍が大改びるくるんて、権の中、色々と入
る時に、ネー、フト和宮からのお手紙があつた、
夫れを入るよ、と、アイト元で、ピツクワ、
よ、其精神の凛々たること、云ふに、
實に驚き、一旦徳川氏に嫁し以上、
徳川氏の為め、生命を捨てる、おるすの
事、この一日千秋の思ひにお待ち申す
分、國の為め、速かに凱旋せよ、と
まゝ、意味。

又

徳川が滅亡に瀕し終に其臣が朝敵とせらるる
に其時ありては朝廷に勤しむるは既に
七えんばかりに任ぜられたるに破し難い
苦心の経緯がある。叔燈の御河柄より
天皇ハ和宮に御内侍があつたといへば
混戦の時代もあつたといへば徳川の断絶の
悲運に遭遇したといへば其の祖上の由
あつた和宮の誠意の道に誤り、其の何
るに就ても軽率を戒め、如何なる場
に於ても自己を犠牲すること甘んじら
んことが朝廷を勤しむ相違なきと思ふ

日本に於ては婦人の行状が歴史家に闕如
せんばかりである。その事蹟のあつたや
あつた人も概してあつたか、一つは史家の慣
習も依るの故、餘りな此方面を注する
いからざるもある。但し天下の大勢に重大な関
係を有する而して其の多量な活動する史
の跡力を有するといへば和宮の如きは改
史の全く前例が無いかとも思ふ。西洋の
史家の如くは史家の決して政治
的婦人を重要視してゐる。其の婦人の
偉大なるが局面を制するに無
い。

○京都の暑熱本年は別一日を過ぎること
が突如おぼろの所から富く旅行をする方が凌
きぬらん。新島の校友舎に行き、一旦物ありし
て又大段、出法すること。北間四五口を
あぐりながら、文法、動く方が暑氣を忘らん。あ
の息は七ある。大段行の要務の場内は遠の
記念市書、一と、後援舎が起る。あ
るは、おのる、七出来たの、其の、あ、人
舎を、し、く、こと、あ、う、臨席、を、い、ん、だ、
ら、打、合、を、あ、林、寺、夜、行、を、出、う、け、林、台、を、着
段、後、互、ち、な、番、費、と、舎、見、し、其、の、番、費
の、い、ふ、に、任、ち、ん、各、社、の、社、派、に、あ、る、人、を、送、

に重なる方面、挨拶の為の訪問すること
する。訪問を、あ、も、個、所、ハ、三、十、の、あ、い、く
と、自、動、車、を、あ、せ、る、に、二、三、時、間、を、あ、
り、果、せ、る、こと、ハ、不、の、結、ひ、あ、る、から、若、干、者、略
し、七、二、十、数、個、所、を、歴、訪、し、た。北、二、十、数、所、の、内、ハ
ハ、内、行、の、あ、い、く、の、人、々、が、あ、る、中、村、八、次、郎、や、あ、り、
史、家、あ、い、く、の、あ、い、く、の、白、井、や、あ、い、く、の、あ、い、く、
方面、ハ、大、林、生、助、村、を、あ、い、く、の、あ、い、く、
今、井、岡、寺、の、あ、い、く、の、あ、い、く、の、あ、い、く、
初、め、の、社、名、を、あ、い、く、の、あ、い、く、の、あ、い、く、
か、あ、い、く、の、あ、い、く、の、あ、い、く、の、あ、い、く、
ふ、が、主、人、在、宅、の、所、七、六、七、十、所、あ、い、く、の、あ、い、く、

禪師の肖像に就て資料たるべきもの蓋し四件あり、其第一は禪師自筆の肖像なり、禪師は書を道友有願に學び布袋、髑髏、盆踊りの圖などあり、巧者にあらずと雖も皆筆者の風神を偲ぶに足る幽趣あり、自像の多くは畫讚にして、如何にも枯淡蕭散の氣分あらはれ觀る者をして親しく禪師と相對する思ひあらしむるなり、凡そ畫家にまれ彫刻家にまれ、目的物なき作品は偶然にも能く自身に似るものなりと云ふ、まして自像なれば必ず禪師の容貌風姿を髣髴するものとなすべきなり、第二は禪師に親炙せる者の描寫にして、就中僧遍澄は自ら禪師の法弟なりと稱し、慶應三年上州前橋の藏雲和尚によりて上木されたる禪師詩集の卷頭に掲げられたる坐像は、遍澄が丹精を凝して之を描き尙ほ貞心尼等昵近者の合議を経て、貞心が藏雲に手交せしものなれば最も信憑するに足るべく、其他三條の華亭の描きたるもの、羽前の九木の描きたるもの、龜田鵬齋の描きたるもの、筆者不明のもの多數あり皆參考たるべし、第三は血族の研究にして、禪師の甥なる三條町加藤新一郎氏(現代重助氏の曾祖父)は能く禪師に似たりと云はれ、而して其人は脊高く、顔長く、鼻高く、眉目秀でたる人なりしと言ひ傳へ亦た加藤家の直話なり第四は故老の口碑并に容貌風彩を記述したる文書にして、今より四十年前までは新潟縣西蒲原郡、三島郡、南蒲原郡等に禪師生前の事どもを、兩親又は故老より直聞し居たる人少からざりしが、禪師は脊高くして健脚、顔長く殊に頤長く、鼻高く眼は少しく斜視の氣味あり、服装の枯淡なるは勿論、常に黙寂悠悠として好んで童男童女を相手となし、慈愛滿面に溢る、間にもおのづから氣高き相貌を具えられたりと

我越後出身の彫塑家榊澤清君多年禪師の鑄像を心掛け余等に謀られしを以て、余等は數年に亘りて前記各件の資料を漏れなく供給し、君は丹精を凝し苦心を重ね塑型を改むること再三、幾度か余等同人の批評を経て、今や深き信念あるものを作上るに至れり、依て舊來禪師に縁故ある者相語らひて、謹で之を大方に推薦せんと欲するなり

此鑄像を作上るに就て佐藤吉太郎君の資料蒐集に勞され武石弘三郎安田靱彦兩君の懇切に各専門的意見を加へられたる事を特に感謝す

良



高 上等桐箱

● 分割拂印
御相談皮

禪師の肖像に就て資料たるべきもの蓋し四件あり、其第一は禪師自筆の肖像なり、禪師は書を道友有願に學び布袋、髑髏、盆踊りの圖などあり、巧者にあらずと雖も皆筆者の風神を偲ぶに足る幽趣あり、自像の多くは畫讚にして、如何にも枯淡蕭散の氣分あらはれ觀る者をして親しく禪師と相對する思ひあらしむるなり、凡そ畫家にまれ彫刻家にまれ、目的物なき作品は偶然にも能く自身に似るものなりと云ふ、まして自像なれば必ず禪師の容貌風姿を髣髴するものとなすべきなり、第二は禪師に親炙せる者の描寫にして、就中僧遍澄は自ら禪師の法弟なりと稱し、慶應三年上州前橋の藏雲和尚によりて上木されたる禪師詩集の卷頭に掲げられたる坐像は、遍澄が丹精を凝して之を描き尙ほ貞心尼等昵近者の合議を経て、貞心が藏雲に手交せしものなれば最も信憑するに足るべく、其他三條の華亭の描きたるもの、羽前の九木の描きたるもの、龜田鵬齋の描きたるもの、筆者不明のもの多數あり皆參考たるべし、第三は血族の研究にして、禪師の甥なる三條町加藤新一郎氏(現代重助氏の曾祖父)は能く禪師に似たりと云はれ、而して其人は脊高く、顔長く、鼻高く、眉目秀でたる人なりしと言ひ傳へ亦た加藤家の直話なり第四は故老の口碑并に容貌風彩を記述したる文書にして、今より四十年前までは新潟縣西蒲原郡、三島郡、南蒲原郡等に禪師生前の事どもを、兩親又は故老より直聞し居たる人少からざりしが、禪師は脊高くして健脚、顔長く殊に頤長く、鼻高く眼は少しく斜視の氣味あり、服裝の枯淡なるは勿論、常に黙寂悠悠として好んで童男童女を相手となし、慈愛滿面に溢る、間にもおのづから氣高き相貌を具えられたりこ

我越後出身の彫塑家榊澤清君多年禪師の鑄像を心掛け余等に謀らしを以て、余等は數年に亘りて前記各件の資料を漏れなく供給し、君は丹精を凝し苦心を重ね塑型を改むること再三、幾度か余等同人の批評を経て、今や深き信念あるものを作上るに至れり、依て舊來禪師に縁故ある者相語らひて、謹で之を大方に推薦せんと欲するなり
此鑄像を作上るに就て佐藤吉太郎君の資料蒐集に勞され武石弘三郎安田靱彦兩君の懇切に各専門的意見を加へられたる事を特に感謝す

良寛禪師鑄像



高サ(曲尺)六寸三分
上等桐箱入 代金參拾五圓也

●分劃拂御望の方是最寄申込所
御相談被下度候

箱書筆者

新井石禪老師 入澤雲莊博士
高橋雄峯先生 安田靱彦畫伯
箱書筆者の御指定は蒙御免候

市島春城先生
相馬御風先生

○此頃の数の施の清心のためと推せり。此
頃の追刊のお難物語である。お難、新橋の故
く、後年、桂公の二番と云う。例の焼打事件の時
呪の的と云う。此よみある。あの時お難が、あまの
の苦心を、此物語の心を暇を、出せんとす。す
し、此物語、むち、讀むべきことある。あまの
の苦心を、此よみの、此、決死の、志、取
つ。此、ことが、認め、六日、露、禰、和、陰、桂、公
め、河、く、娘、河、此、七、世、の、法、が、夜、ふ、こと、出
来、深、夜、伊、孫、公、の、河、河、を、受、け、桂、が、故、帳、の、中
に、机、向、に、書、札、を、讀、み、苦、重、と、の、此、陰、伊
孫、公、の、讀、む、事、ある、と、言、ふ、故、帳、の、中、に、
十二

を、この、倉、皇、起、る、時、の、燭、台、を、燃、死、し
際、も、馳、せ、降、り、あ、ま、の、故、帳、に、此、が、物、お、難
ハ、ま、を、讀、み、止、ま、る、火、傷、し、た、こと、や、伊、孫、公
が、對、面、此、の、歎、息、し、り、互、に、手、を、し、り、
菊、菊、酒、を、飲、け、む、世、に、此、を、存、在、元、久、子
誠、に、信、む、ま、あ、ま、の、今、ま、の、言、め、ある、と、思
は、る、桂、公、今、世、の中、念、ひ、誠、念、つ、ま、ゆ、つ、た、の、を
伊、孫、公、が、自、分、ら、印、し、る、ま、た、の、ひ、ある、。此、の、物
語、お、難、の、自、白、を、著、し、た、よ、み、と、い、ふ、か、
長い、物語、の、あ、ま、の、政、況、や、其、故、神、の、世、に
ま、つ、は、る、話、の、あ、ま、の、あ、ま、の、花、柳、界、の、不、下
史、の、あ、ま、の、自、分、の、こ、ん、を、讀、み、其、味、も、あ、ま、の、

妻と云ふは、先づ由依ハ許さず廿三才迄未だ也
つて介男嬬の評判を傳し、ある女ハ大森を
まを連れ出し、短銃を擬し、まを逼つたが、
東京を逃け、ゆつたことするある。ある情客ハ振ら
ぬに、腹金をも、其画家をも、合わすの目をも、
とて、美を捨て、贈ると、其使の目も、ビリくと
割いて、美氣を弄し、とある。志むく、金、
蜜を喰ませるものがあるが、いつも、美を自から
女其の家、高らし、玄関先、投げ、人か、返却
あるを例とし、禮が、荒岩より、常陸山を買かし
と、得た、万段の、祝儀を、贈る、佛然、怒つて、坐を、主母の
とあるが、他の、一妓、も、ふ、後、取、と、女、例、が、い、く

く、あつた。難が、某、外、四、貴、宿、の、前、茶、を、主、に、流、か
れ、終、つ、た、が、他、の、一、妓、も、ある、時、某、并、族、か、茶、を
取、り、ま、り、て、馬、車、に、乗、り、入、り、ま、り、と、且、那、の、許、を、得
る、け、ん、か、矢、う、と、並、行、する、と、い、ふ、こ、と、も、あ、る、こ、と、も、あ、る。
難の、自、畫、の、佛、像、が、物、持、の、初、頭、と、出、て、お、る、が、他、の、一
妓、も、天、の、子、と、傳、を、ま、り、と、書、の、中、に、拍、子、の、歌、を、ま、り、と、
ま、り、と、以、た、字、と、書、い、た、が、飽、ま、り、世、性、を、領、の、後、を、
ま、り、と、ま、り、と、書、い、た、が、難、も、も、優、つ、て、お、る、こ、と、
あ、る、こ、と、難、の、家、持、の、婦、と、ま、り、と、書、い、た、が、お、る、こ、と、
終、つ、た、が、他、の、一、妓、も、從、優、の、婦、と、ま、り、と、書、い、た、こ、と、
あ、る、こ、と、從、優、の、婦、と、ま、り、と、書、い、た、が、後、の、一、次、中、の、藝、を
ま、り、と、書、い、た、が、一、見、後、か、あ、つ、た、あ、る、時、一、次、中、の、藝、

かんじ時、彼女に放言した。妾の好きまのいふ事の上の
一歩印さるや、頭屑の如くは、悔ひれといふた。◎
コニ事をも許さる任せを放法するも、西鞠流の閑談
るに、一息であつた。此の松栲絲の女将もある。此の松を
下谷の奴と似寄があるのむ、往年、互ひに約して、毎の
書状の往復を、我れはまをりたことも、あるさるんが、三
十日も、懐いた。えん、縁ありあるから、自れ前のこと
き、懐い、油母の出るのも、偶れひさる。某、克、奴が酒を
ぬすけさる、松絲の女将のことを、スツバ、抜き、此人
ハ利巧さきことと、まへへ、云い、ん、る、ま、ま、い、美、ハ、顔
る、虎、抜、け、の、人、だ、と、い、ふ。さ、え、ハ、自、分、さ、る、初、身、か、あ、つ、て、
大、使、家、に、拜、金、宗、に、か、た、ま、う、切、つ、て、あ、る、と、い、思、ひ、の、お

があるところ、さる虎抜けのわがよいの、此、その、鉄、跡、が
ま、け、ん、ハ、愛、賢、に、懐、き、ぬ、と、自、分、ハ、笑、つ、た。

◎青画や骨董にて、奴が、執、味、を、因、り、した、こと、の、一
例、と、して、下、谷、の、奴、ハ、あ、る、客、人、が、示、した、清、宗、殿、に、
あ、の、一、行、物、山、は、山、お、は、い、◎、ま、ま、を、い、と、
く、賞、し、た、其、の、客、人、ハ、ま、物、を、◎、以、つ、て、此、奴、
を、拘、え、ん、と、い、は、終、に、應、じ、さ、る、う、れ、の、お、其、
客、人、ハ、往、向、や、け、を、た、し、し、て、其、物、を、公、計、に、
と、家、僕、に、持、つ、た、家、僕、ハ、◎、書、意、通、る、を、欺、
かん、と、さ、る、を、僅、か、た、う、う、の、金、目、子、新、へ、た、り、
を、奴、ハ、支、へ、て、悔、しい、こ、と、を、し、た、が、あ、か、し、ま、
ハ、妾、の、仇、で、あ、ん、が、為、め、不、困、つ、た、の、れ、が、さ、る、の

幅の千二海のとやへてサツパリしと云ふれ。
お魁の物語すゝ出る世の中一えに匹敵するもの
の物語を出して見ると決してぬきもあつても思ひ
まゐ、あかし見え、私にむきけい出来さうから出
日横へささるゝ

○稀書複製会合の複製ものが出たこと
は、さうして、面倒の複製ものがあつて、白地の出来び
ある、浴衣も、靴も、袴も、袴の考証が今般に、靴も、袴も
何さか、愛とぬき、重く、私の家も、浴衣も、袴も、靴も、袴も
衣の白地を自分の家でも、心つた、の、ぬき、靴も、袴も、靴も、袴も
しく、いさゝか、ぬき、靴も、袴も、靴も、袴も、靴も、袴も、靴も、袴も
あつた、白地の出来び、靴も、袴も、靴も、袴も、靴も、袴も、靴も、袴も

稀書複製會々報

第五期 昭和二年
第九回 七月

第五期 第九回配布本解説

小 口 合 中 (紙數二十枚)
原本は若樹文庫所藏。本書の解説は既に脱稿し居れども、紙面の都合によりて掲載を次回に延期す。漫然一見すれば無用の閑書籍なるが如くなれども、本書出現の時代が如何に「思ひつき」を尙びしかを考へて玩味すれば感興一段深きものあるべし。

浴 衣 合 一册 (原本、米山堂藏)

本書は紙數二十丁半より成り、序文と凡例とにて二丁、「東都契松居操夫」といふ署名があつて二個の印章は、上のは「鶴」、下のは「千歳」なり。内容は三十六番の浴衣模様を優雅なる色摺にしたるもの。尙ほ最後の半丁には、追加として、『古金欄手鑑』刊行の豫告を載せたる奉書摺、印刷も彫刻も斯道の精

華を盡し、頗る贅澤なる小本なり。著者は何人の匿名か不明。刊行年月も版元も不明なれど、其發行は天明四年版の『手拭合』よりも一步を先んじ居るもの、如くなれば、多分天明初年なるべしと思はる。天明五年版の『無駄酸辛甘』は『手拭合』の會を催し、動機を素破抜きたるものなるが、其うちに、次の如き文句あり。曰く「それで思出した事が有る、おめへ白鳳堂が幌巾合を見なすつたか、すつとんだエ、思附よ、是は斗園が諸侯をあやなし込んで連中に入れたからとんだ大そうで有つた。そこで皆がまけねへきになつて駒さんをだきこみ、京傳が妹の黒飛式部を會頭にして、故一とゑんばを遣つて路考に跋をかゝせ、花扇とおやを入れたのは、ひろひ世界をいつばいに書て跡の半切り合を仕様といふみんなの趣向だ」。

『無駄酸辛甘』の作者千差亭萬別は手拭合の世話人

に列せし萬象亭の門人なり。よりて思ふに、本書「浴衣合」の著者は斗園にして、「契松居操夫」とは其匿名にはあらずやとも思はるれど、如何あらん。また按ふに「浴衣合」の畫風は著しく北齋派を帯べり。菱の浮葉模様、稻妻繋ぎの地に五七の桐、横縞に双葉葵、秋海棠、青海波の菖蒲模様の如き是れなり。就中浴衣を懸けたる竿の吊り紐の總の描き方の如き酷似したり。園と圓との違ひはあれど、著者は北齋に親炙せりし畫工北亭斗園にてはあらざるかとも疑はる。斗圓は牧墨僊といひ、斗圓樓とも稱し、月光亭、百齋の別號もありて俗稱は助右衛門といひし由なれど、其傳は詳かならず。

今日一般に木綿の單衣のことをゆかたといへるは湯上り衣の謂ひにて、本來は湯帷子の略稱なる由。古くは上流にて用ひし湯上りに湯巻といへるものありき。「四季草」によれば「何にても單なるをかたびらと云ひ、かたとは片なり。表なきをひらとは薄くひらめく意なり。又夏季着する麻の衣も麻帷子なり。古くより麻の衣は賤き者の定まれる服にて、麻の衣はよき人の着すべき物にあらず」とあり。尙ほ湯巻き

に就いては「女の常に腰に巻く湯具といふ物を湯巻といふは誤りなり。湯巻はいまきといひて字に今木、今支と書けりこれ皆一物なり。さてその湯巻は貴人御湯殿に入りたまふ時おほひ召すすしの白き絹の衣なり」とあり。「紫式部日記」などにもゆまきすがたと見え、白生衣也とあり。また「和漢三才圖會」にも「帷（和名加太比良）本幔帳之類也、後人借用爲布禪之名乎。蓋浴衣（和名由加太比良）爲湯帷子、則有據矣。大帷之小者名汗衫共官家之下著也」云々。裝束のことなど記したるものには「大帷とは下著の名なり、形單に似て小く短く、單、相、下襲ねを略してこの帷に、單と下襲ねとの襟を付け或は單の袖ばかりを縫ひ付けて用ひたる由」と云へり。相とは女人の膚に近く着くる衣にて、はだき、じゆばんの訓あれば今の浴衣とは用法も調製も異なる如し。按ふに、當時の上流社會とても、其家常生活に在りては随分所謂浴衣がけにて悠々と打寛ぎてもありしならんが、さりとて其所謂浴衣は木綿の浴衣ならざりしことは云ふまでもなかるべし。民間にては何時頃より木綿の浴衣を着初めにけん詳かならず。今一般

に帷子と稱する所の麻の單衣は賤民の早くより常用せりしものなりしも、それが木綿の單衣に變り、今いふ浴衣と變りしは、そもくいつ頃よりなるか確證を得がたし。貞享五年版『友禪雛形』卷三にも浴衣模様十四圖を載せあれども、染料に金銀泥の配置、筆彩の色調等の説明あれば、これ將た木綿の浴衣にはあらず。

さて本書を繙かん人々は先づ其意匠を凝らしたる圖面によりて一種の感興を催さるゝと共に、浴衣向上の意圖の著者に在りしを認識せらるべし。然れども素より上流に適すべくもあらざるものなれば、主として中流階級を目標とせるもの、如し。然るに年を経て是等の意匠が中流以下の民衆の嗜好にも合致するに至り、盛んに浴衣を着る傾きを生じたるより、自然と其模様の新奇を競ふこと、なりしならん歟。注意すべきは本書中に派手なる模様、大模様の見えざることなり。是れ主として中流階級を目的としたためらしく、後の所謂浴衣模様とは大分の距離あることは、天保頃に流行せし蝙蝠、荒磯などのそれと對照すれば首肯し得うるべし。また祭禮の揃ひ、首

抜きなどいふ大模様と爰にいふ浴衣とは全く系統を異にするが如くに思はる。即ち本書中の浴衣模様の特色は、上品を主としたることなり。縫模様、友禪模様以外の純粹の染模様にて斯くまでに仕揚げんとせば、その染色の工夫に甚深なる注意を拂はざるべからず。もつとも、開卷劈頭に出だせる模様は、本書の意匠としては、や、破格と見らる。こは後に云ふ、三くづし縞を擴張したるまでのものにて、餘り上品向きのものとは思はれず。三くづしはと舶來織物の模様なり。交通不便なる當時に在つては、民間にては、手に觸るゝことさへ稀れなりしかば、和蘭陀渡りの織物といへば綾錦にも比して、一般に重視されし風習あり。随つて其模様の如きも、今日より見れば上品と思はれざるものも、和蘭陀模様と稱して珍重したりき。されば『寛明間記』に「明暦元年正月十四日蘭人献上品、奥島十端」とあるも、この三くづし縞の織物なり。これらは上流の貴重品に屬し、羽織や袴などに仕立て、着用され、民間にても富豪の輩が金に飽かせて求めて誇らんとせしも容易には手に入らざりき。その模様の三くづしを擴大したる

が巻頭に載せたるものなれば、後世に三くづしと稱して、俗にイナセ肌の連中の好んで着せしものとは、同一の模様ながら此頃は舶來模様として品よきものとして取扱ひしならん。特に此三くづしばかりでなく、巻中の模様は品位の高尙ならざるもあれど、同じ意味より出てたるものにして、世相の反映を示すところを見通すべからず。また染色に數種の色を應用したるは友禪染より轉廻せるなり。この書發行の天明度には既に木綿浴衣は一般民衆の間に行はれて向上の思想萌し、染模様も精巧になりしも未だ浴衣がけにて外出するまでには至らざりしならん。男女とも浴衣を着て外出するやうになりしは寛永以後のことなるべし。

味をそ、るふはぐあうは、お連、随分おぼ
る衣粧をみるは、此の白地も少年の心はよ
いよと思つたよ、おぼるは、おぼるは、おぼるは、

あいのよ、おぼるは、おぼるは、おぼるは、
ガう、おぼるは、おぼるは、おぼるは、
おぼるは、おぼるは、おぼるは、おぼるは、

〇暑無、おぼるは、おぼるは、おぼるは、
向うも漢的、おぼるは、おぼるは、おぼるは、
おぼるは、おぼるは、おぼるは、おぼるは、

一都の江に横たふや時鳥

五石寺

閑さや岩に、おぼるは、おぼるは、おぼるは、

鳳来寺に巻物

木枯は山花吹と、おぼるは、おぼるは、おぼるは、

鐘消えて花の香の撞く夕へかき
馬こ寝て残夢月遠し茶のけず
秋ふかき疎い何をささる人ぞ
夏の月御油さう出て赤坂や
粽ゆふ片手にはさむひれいね友
危甚ぶ裏の燕のかうひ道
無性さわかき起さんし夏の雨
涼しさやまらぬ野松の風のきき
夕顔や砂を懸出さ窓の穴
山殿のおとがひ閉つる蓮かき

のしりとりテモとの不該が逆用々んて歌の年まの
志かし若しカ岸定句：若つれ例かあるとしく
芥川流く女の造り中すく一二の例か示せんとみ
る

え縁の四年上様の徳甚甚の中

秋風かいどかせうじくはす
此のともわかあるをともかくするのとむかひあ
うといふ流もある

○先月下旬より取り出さるべき余の抱き、印刷中
旧稿の紙に不足を先けて取り直さるべく、今朝の
朝日と如くして、先が出た、こんを真夏と出
産さん比史の運命のじんさるものか、花ふま
の、原稿に云口と云へる、後辭を出版部
に送るは、心づかひ、自分共々、自分共々、
徳義上、自分の著者の吹聴を、自分共々、あつたこと



圖寫縮酸吸聖三筆尚和隱白

隨筆春城六種

市島春城著

四六判六百頁
總布函入美裝
定價貳圓八拾錢
郵稅拾貳錢

早稻田大學出版部 發行

東京牛込
振替 東京一三三
大坂六八九〇〇
圖書目錄進呈

最新刊

▼趣味讀本たると同時に人生哲學
著者の隨筆は隨筆中の隨筆。いかさま隨筆、ゴシップ雜文の横行する現代に於て正に卓拔の一大文學である。著者は稀有の人情通、藝苑通、史實通、圖書通、政治通、等々々であり而も縱横透徹の見識を語るに圓熟玲瓏の藝術を以てする所、眞に天下獨歩である。銷夏新秋の高級讀物とのみ見るは當らず、就いて無盡の教養、趣味の啓發を享け給へ。(自次大要)(一)感興深き追憶(二)默想舊夢談(三)圖書の折々(四)趣味談採録(五)著外録(六)衝口發

隨筆 賴山陽

市島春城著

七三六判

稅價 三・〇〇

春城 隨筆

市島春城著

四五六判

稅價 二・八〇

ハルマ
八月廿日

異國人に就て

半白老痴

異國人即ち和蘭人のことを記した書物は数多くあるといふけれども見聞のない私は未だに接してゐない。

○此着のちを(楽)左の記すがある、丸山の遊女
が外國より出てける消也の消也の消也の消也の消也
〜の執り多しむるもか、内家の事さるる候托
と思はんまのふら
こころぬめとおく
八月音記

徒然のまゝに此花第三枝を披見すると

- 吉利支丹退治物語 (寛文五年版)
- 長崎島眼鏡 (元禄十六年著)
- 繪本池の蛙 (明和五年版)
- 奥股綾眼現金論 (天明五年版)
- 缸毛雑話 (天明七年版)
- 西遊旅譚 (享和三年版)

とあつて挿畫が並列してある、時代を追ふに従つて想像から實際への近づきを保つてゐる。

天明後には銅版もの、發行が数多くあつたといふ。國書刊行會本甲子夜話續篇三十四に「長崎より到来せし迎或人一圖を示す長崎に於て版行するものなり」。「今年入津の蘭船に乗渡りし婦人は珍しき事なり迎入津の日より見物の船往來絶へず蘭にては最美人のよし稱すれども吾國の目には悦ばざる容貌なり又肖像を撮出せるは波止場役諸熊作太夫が子八郎が描く所なりとぞ」さあつて縮寫の挿畫あり又卷四十六に「擲に三十

四卷に近來渡來せし和蘭婦女の圖を載す予(松浦)又崎陽の留守に命じて彼女の肖像を呈せしか數月を経て郵送す彼地にて刻板せし形は殊なり右蠻人は蠻畫の態あり、和人は和畫の態あり和畫の意を以て蠻人の貌を寫す因て自から容色も別なるなり」と記されてある。右につき外骨翁は明治四十四年の春、東京某家より出てたりといふ古き貼込帳の婦人圖を其の年の八月文行堂主人から譲受けたといふて三十四卷挿入圖の原因を摸刻して此の花(第十)に載せてある。

先日荒木鏡吉さん方を訪問すると、ゆくりなく所蔵品の内から洋人男子の肖像錦繪に探ねあつた、時代は新らしく當時騒されたベルリの畫像である。筆意描法が殆んど同一であるから對照のためにと寫眞版につくらせて掲ぐることにした、異人の珍らしがられたことは畫に文に種々に傳へられてゐたことはこの僅々材料でも推測のほゝるみを持ち得るが、その後、長崎丸

山の一娼妓が和蘭人と夫婦になり本國へ渡つたといふ珍事が傳へられた書信に接するを得た、これは蘭婦人畫の傳へられた文政十二年七月から十四年目の出来ことである、半紙に寫されたその全文を掲げる。

長崎丸山の遊女
阿蘭陀人と馴合
長崎表を出奔致
し親里表へ阿蘭
陀より送り候文
の寫

弘化二年巳正
月府中に而是
を見寫取る人
有之ニ付珍書
ニ付又寫ス

と表紙書してあ
る、そして本文には

大阪谷町之上ニ小橋あり少々北へ入候所ニ而堀屋清兵衛と申もの娘ふみと申女北堀之松車と申茶屋え年季



文政十二年七月から十四年目の出来事である、半紙に寫されたその全文を掲げる。

奉公ニ遣シ置候處右ふみ文政三辰年ニ長崎丸山え住替ニ相成夫より阿蘭陀人テルユート申者と女房之約束致し同文政八子ノ九月二十二日之夜長崎表を出奔致し十六年ぶりにて親里堀屋清兵衛方え送り候文之寫

(載所の花のこ)

あまりとやおんなつかしこのまゝ文して申あげまわらせ候まゝ御機嫌能被爲入候事目出座御嬉し敷そんじ上まわらせ候さよふに候得ば私事ふ致し候條にて阿蘭陀人のテルユート申おんかたと二週差約束致シ文政八子の九月二十二日の夜長崎表より船に乗りあらをそろしき沖中え参り候所しきりにおん母の御事ナおもひ出シ明暮なきくらしまわらせ候七日目ニアツノといふ西南ノ松の間に見ゆるは富士山ニ承りふしおがみ富士

山は日本の見納こそんじ候得ばかぎりのふなつかしさ彌くなき暮し候得共ぜひなく其日を暮シその夜折節大風雨吹出シ二十日計り晝夜こなく船走り申候處風もやみ候まゝ船の櫓こ申所え上り四方を見渡し候得共東西とおもふ方ニ一ツの島ありよく見へ候まゝあれハ何方とたづね候得は日本の地より四千里程はなれ候よし承り夫より船とまり又々明方風吹出シ唐の北海とやら申所より船走り候事凡三日計り漸く風もやみおだやかに候まゝ最早阿蘭陀へ何程御座候哉と尋候へば二千里許りも有よしわたくし茂かよふなる遠くの人ミ縁



(荒木磯吉氏所藏)

は二十里ほど私シを見物に参り候夫より船に乗り五月朔日漸く阿蘭陀ミケイケルト申所え船をつけ私シ夫の國ハフルテルシヤト申候夫より参り見れば母様人ミ妹一御座候日本ニ而は庄屋郷士とも申くらしい

をむすび候トおもへん我をうらみ又々なきくらしまわらせ候諸々不孝のつみ逃がたく御母様にも嗚々御恨候やこおもい暮シ候まゝ其の内に正月十三日之日ニ天竺のイハイト申所え船ヲつけ其之所ハ阿蘭

陀の間屋ニ御座候由シヤキワト申家に久敷逗留致シ其の地の人日本人参り候とてめづらしがりて五里十里或

家にて人茂大勢をり申候なに一ツ不足なく暮シ候よ
 ふすまつ〜おちつき候得共喰物ハ牛馬又ハぶたの
 よふなるものをつね〜たべ申候ハ少茂なく私
 シは日本之ものなれハ迎天竺より米を取寄たべさせ
 くれ候まゝ少茂なんぎハなく候得共只々日本の事計
 りおもい出シかなしく日々ニなき暮シ候儘此方の妹
 きの毒なるよふすにて相談ノ上五十坪計りの田地を
 つぶし日本のよふなる家をこしらひ其中に私シの母
 様と妹の姿をもくぞふに拵い日本に居るまねをして
 日々に酒宴ヲ致シいろ〜なぐさみ候儘少茂不自由
 なく家内むつましく暮シ候儘まつ〜御心易御安心
 願上まゐらせ候夫につき男子一人出生致シ最早當年
 ニ而七歳に相成申候名ハイリキンと申候日本の婿を
 致し聞せ候得ハシャイモインエトなき申候シャイモ
 インエト申は母様やおば様にあいたいと申事ニ御座
 候傍亦此方ハ日本の晝が夜ノ七ツ時分夜明方ニ當り

候由私シ茂夜明ニなり候得は日本の事計り申候私シ
 心がらとハ申ながら今更しよふもよふもなく心の内
 御すいもじ被下不便と思召被下候而長崎の友達茂
 ふみ遣シ度候得共中々六ヶ敷母様ニ茂度々文シテ御
 よふす御尋上度候得共格別心安キ人ならでは一筆の
 文茂頼む事六ヶ敷長崎之つふじにまいないを致シ候
 而程よく頼ミ申さねば私シ茂なんぎになりその上夫
 トも其地えまゐり候事六ヶ敷誠にきびしく御座候夫
 故文茂あげ不申此度ふとしたよき便りニ而候故文に
 て申上まゐらせ候是茂全く神佛のをんかげト難有ぞ
 んじ明ヶ暮神明様や大阪天間の天神様や其の外八百
 万神様をいのりまゐらせ候又此方よりも珍敷品差上
 度候得共文さへ六ヶ敷尤格別な事さへ認めねハたと
 へあらはれ候ても格別の御咎めも有間敷能折柄とそ
 んじ候得は私シの髪のをきり差上申候是をわたとし
 と思召被下候よふに願上まゐらせ候又其の方様より

茂御文被下度思召御座候ハ、そのおんちの唐物商人
 藥種取扱人を見立可被下候此方の名はモウヤフルテ
 ルユウトつふじに上書を御頼御送り被下候得ハかな
 らす〜す相届き申候誠におもへ〜不孝のつみ
 暮れ〜茂おそろ敷幾重に茂御ゆるし被下よ〜
 の悪縁ニ御あきらめ被下候よふ願上まゐらせ候妹て
 ふを私シと思召おてふ茂私シとなりかわり御母え孝
 行致し呉候よふ返す〜茂願上まゐらせ候申上度事
 ハ海山に候得共中々筆に盡し兼御すいもじ被下かし
 先ハあら〜目出度也

阿蘭陀フルテルユウ内

ふみ事アンナルト申ス

天保十四年卯正月

堀屋清兵衛様

並ニ御母様

同 おてふとの

○ 御文の儀は御上様まで差上御覽に入候由に候別而御尋

茂無之相濟申候義に承り依之右之趣末紙ニ書印シ申候
 まんざらの封書でもあるまじく、これは寫しであるか
 ら半紙に認めてあるが、同じものか半切に認め、小島
 の殿様の御拂ひものゝ内から出たと言ひつたへて江尻
 の齋藤氏方にも残存してゐる、この手紙は珍らしさに
 奪ひあひに寫しとめられたもので、馴染だのが文政八
 年とあるから肖像畫の出来た時から四年前の情事に當
 る。

和蘭婦人の肖像の版行されて賣買のあつた文政十二
 巳丑年から慶應三年まで三十九年、珍らしかつた洋人
 の衣服を着するやうになつたのは驚くべき珍奇さであ
 るといへる。慶應義塾藏版之印といふ篆字の朱判の押
 してある「西洋衣食住」といふ小形木版本（片假名字
 交り）を手にした。開化之魁であつた福澤諭吉一派の
 西洋心酔の吹聴的宣傳書ともいはれやう。同書の巻頭
 には

○本道樂

題旨

近來世上に西洋服を用ゆる者甚だ多し武用其外立働に最も便利なること擧ていふべからずしかるに世人或は彼國衣服の製を心得ずして譬へば暑中に綿入を着、襦袢の代りに羽織を用ゆる等の間違も少からず今この小冊子に彼國衣裳の一ト通りと亦兼て食事の諸道具寢處の模様をあらまし其圖を記し其用法を解き聊不案内の人々に示すのみ

慶應三年
丁卯季冬

片山淳之助誌

とあつて衣之部、食之部、住之部に分ち丁敷十九丁の小冊子、部門別にして其の要をば摘記してある。

斯うした事から西洋情調の染み込んで最う六十年にもなつてゐる、モダンガールの身持ち穴勝ち咎むべきでないかも知れぬ。

○此日書中り未随筆を心
えと思ひ立ち思ひ出す
まこと茶の葉に載るる(き)
ことを追々藪がきんかん
と、先づあかしな目をた
る揚ぐ

八月廿日

別府の神社

還唐の室

中華書局の目録

春のふゆ

茶の末

椎木の馬

酒一則

去井雲

酒(香)

後出八境

造花

寺島の産業

市士のあり

、考選の前提

、猫いしずの自殺

、古をな

、ビスマール、ヘリング

田中ち山伯

、小畑輝晃を懐小

、木戸孝允のモ合

、改選任歴の二班

、東西もあるの合お論

、後世修と就と

、薬師のふ

、道達の其を兄と

、梅木の配将隊

、明流又藤の家談

、鏡

、愛玉子

、加次川堤の根元

、アジール 道科屋

、牧野家の義犬

、北条江り

、十和田湖

、浅河山

物者録

、今の況

、一九の秋山紀行

、半峰昔譚の跋

、家持書画の査定

、ポスター

、新編の妓

、前田家の書物査定

、モリツンの受印古田

、毛断せと魔々々

、朝か目と新夕

、無駄花

、新編の妓 西洋の書物査定

、モリツンの受印古田 毛断せと魔々々

、路次の花味

、秋山湯の人影のある洋

、自分と流字

、田比田君 雑

、扇子

、印人の歩き方

、山川の風景

、松方——レニン

、高橋氏の死と島の三印の電紙

、市谷入るのり余の家丹皮も出つ

、岩室と小木の垣す

書生以代り膝栗毛の

、節分の相付ふたいの

遊楽秘法

、評議中の死活輪轉流動

、大家のおよそ斯の如し 活霞の致

、一将の成り音骨杖 大切な役目

、松の下の方持 煉化工次殿エー自分

、庭の記 ちい山伯入系

、正公公波の紙六十五行

、強此聖毛湖疏みの臨海木

、三宅銅穴

、老雄長柄木のころ

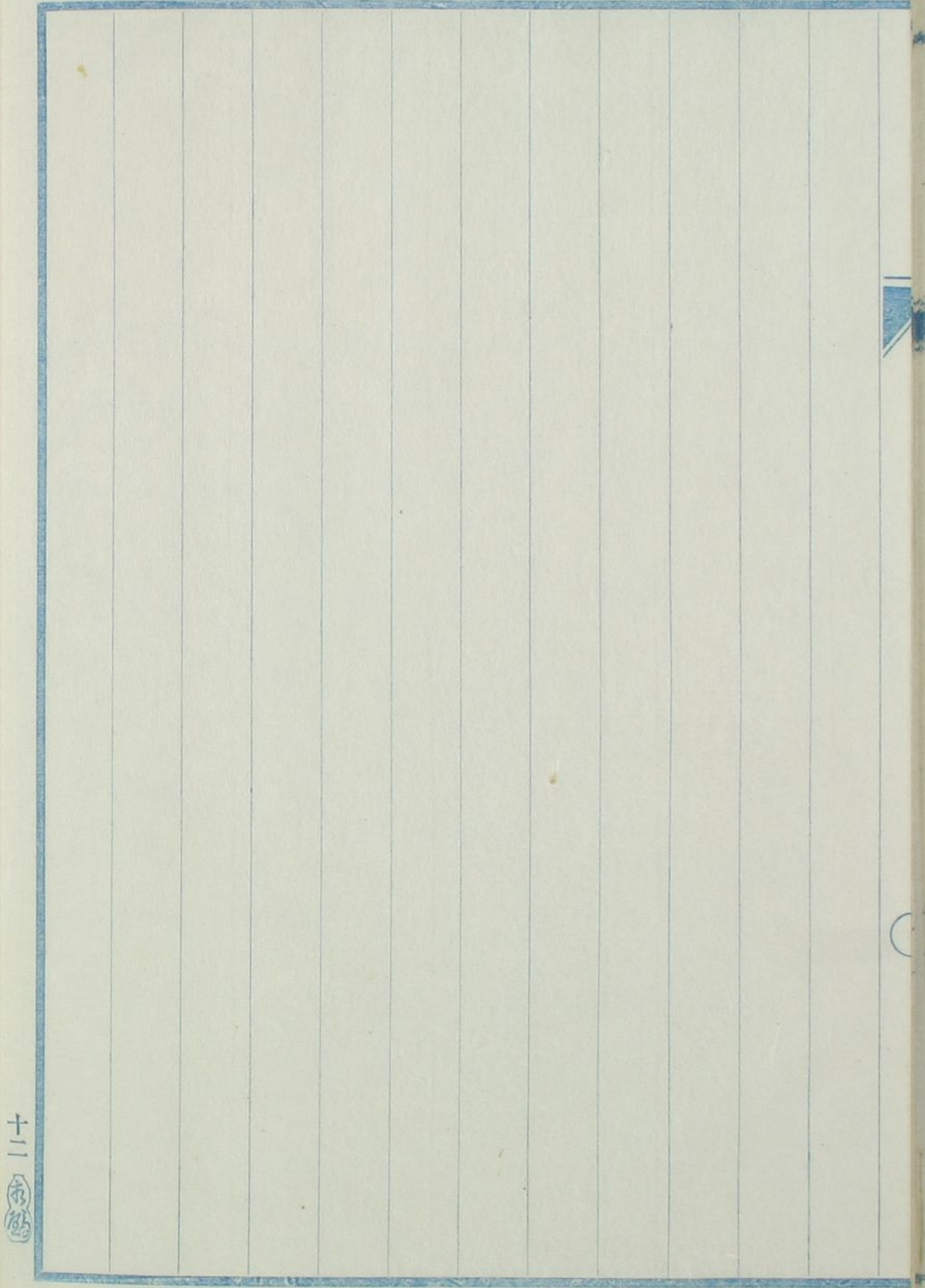
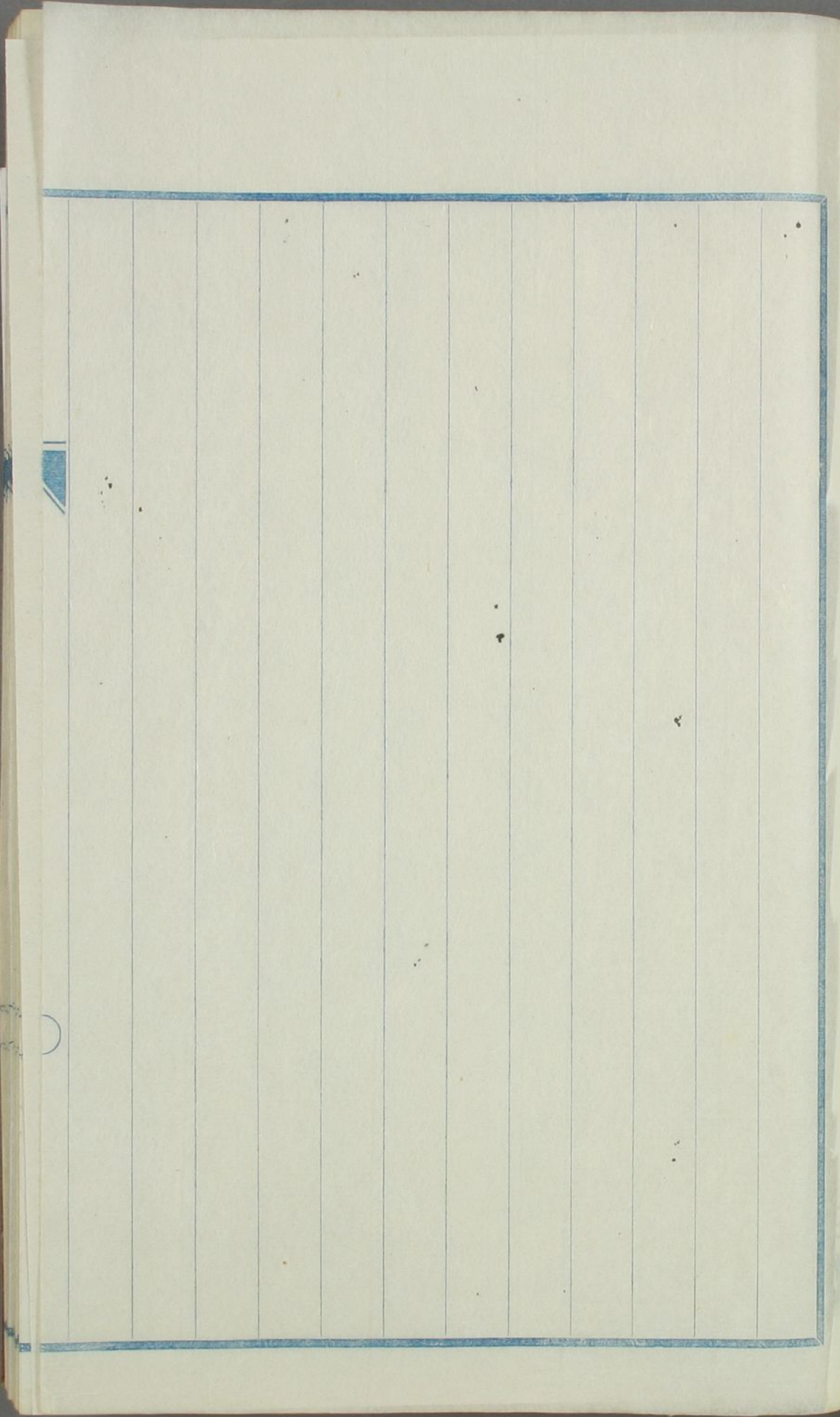
、白蟻

、娘の垣す

、山陽寺勅集を千うしと

、林酒

、銀生と余



川柳子

初松魚女らの初を呼び送る

初の花が五る松魚が五る

金持を見くびつて行く初松魚

初松魚并舞の舞のうちを穿る

○初来候に舞を穿るこの物くささ、お物屋
こまきあり木林岐紅の花およ多しを贈る由り、
若中毎聊を消するの膚の終らんよめかよ
と、正さとしらひちあいのを貰ひ入んてすすめ
か、後人の見ると内容とするに情話のちろきつ
てある。目かえや花柳に遠目さかう妓らよ、親し

み吉梅子を三年輩を振り及ての川崎流を
とい林又見えか、こんなをび讀むと縁
ハ全く逸してみる。此書の著者の可なり花柳道
し此人と見へて、花柳語に道じ妓情も麻し、茶
も軽快である。利庵東京を氣あさるともい説ハ
江戸の兒の権柄である。の又うらやま文ハみ
づうう道湯鏡境遇を託しよのむけんハ
書けよの業ハある。若い時花柳に投し以資
本の収獲を先ん或許取り戻すことか
出来よの七葉といふよを運か得る其のお
蔭と云ハぬへるさうい。此の著者の自白に極ハ
酒ハ一切好まざるといふある。此點ハ注意すべき

である。酒具に乗りの花柳の扱ひハ快ハ快ハ
夢のやうなるよハ花柳の纖微の味を多く痛
し仕舞ふ、その纖微の味を捕捉し微塵の
こ妓情に通すのハ酒飲がである。真厭ハ妓
のミソジラを見出し、賦海高を以て酒に換
へて時間を潰してゐるハ、それこそ自述酒客が捕
近いことを捉へし。妓情もあし得るのである。此
著者の情話ハ春物から志境まの事ハ種
の趣々者あつてある。中々の同感を持ち得るハ
ともあつて、二日間の無聊ハ此書で消すことが出
来たハ何事アリかあるハ
八月八日



VOL. 7 MUSASHINO WEEKLY No. 32

(A Week From August 5th, 1927)

A United Artists Picture

THE GENERAL in 8 Reels

Johnny Gray	Buster Keaton
Annabel Lee	Maian Mack
Her Father	Charles Smith
Her Brother	Frank Burris
Capt. Anderson	Glenn Carpenter
General Satcher	Jim Farley
General	Frederick Broom

Story and Direction by Buster Keaton and Clyde Bruckman, Scenario by Al. Bausberg and Charles Smith.

MUSIC

Castillian Fox-Trot

LA VEEDA by Jim Alden

A United Artists Picture

THE GOLD RUSH in 10 Reels

The Lone Prospector	Charles Chaplin
Big Jim McKay	Mack Swain
Black Larsen	Tom Murray
Georgia	Georgia Hale
Jack Cameron	Malcolm Waie
Hank Curtis	Henry Bergman

Story and Direction by Charles Chaplin.

上映順序 (自八月五日)

キートン 將軍

一 武蔵野管絃樂隊演奏

二 ラッツァー 田中末松

三 黄金狂時代 徳川夢聲

武蔵野館 電話四六一四二番

彼の戀劇も加はつて彼の鐵道勤務は兵役が嫌さの通辭だと言つた。俄然一八六二年の春、兩國間に恐しい歴史的特筆すべき大激戦が起つた。

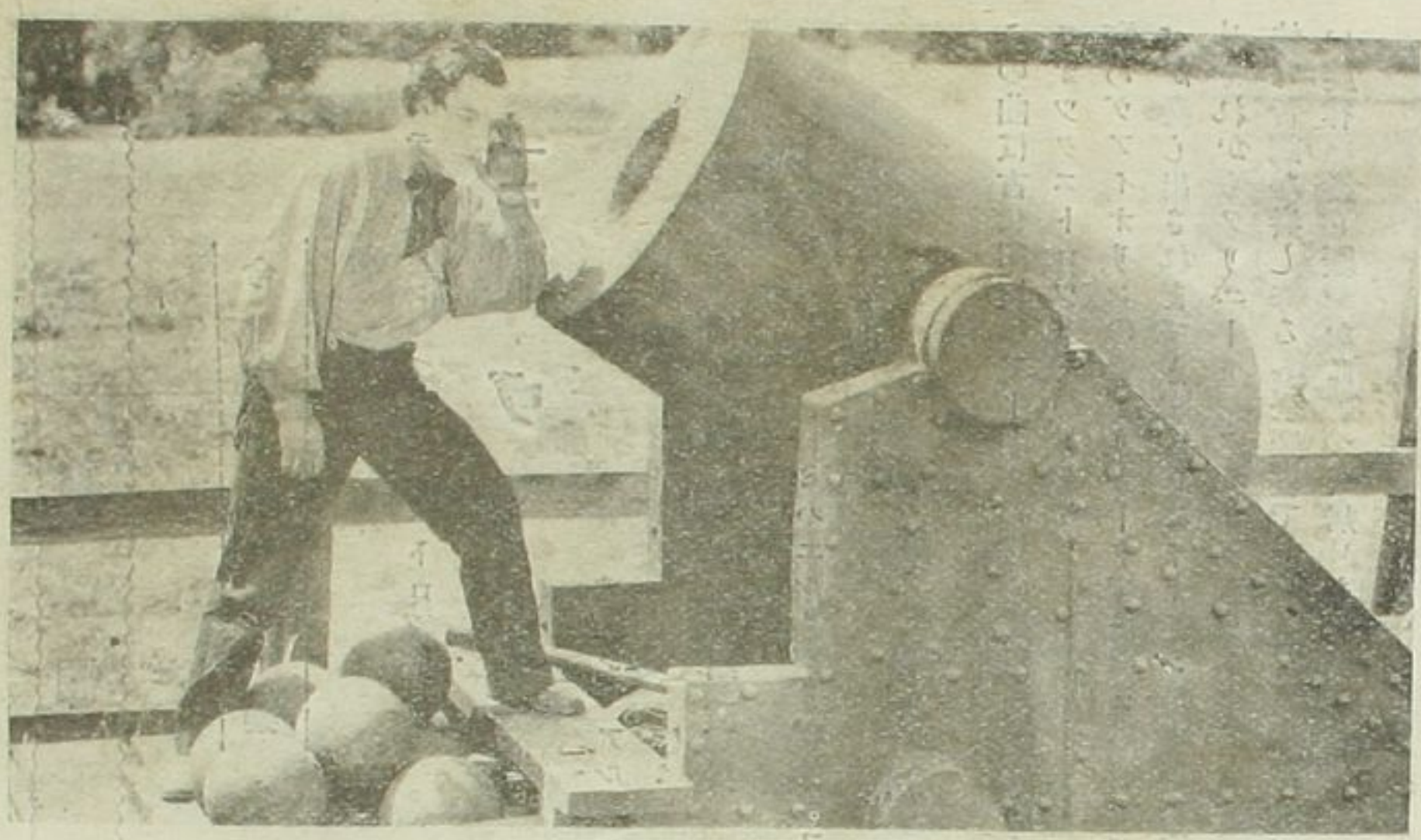
説明 山野一郎 伴奏曲目選定 長谷川秋甫



ユニオンテッド・アーティストツ映画
黄金狂時代 全十卷

略筋——一八九〇年の頃アメリカがロシアから買ったアラスカに、大量の金銀がある事が発見され、あらゆる世界の隅々から幾千幾萬の人々が此の極北の地に死物狂に集つて来た。それが黄金狂時代と言はれた時代であつた。
雪に降り閉ざされ、氷に張りつめられた此の極北の地に一人ぼつちの金銀探險者があつた。山は山に崩れ、谷は谷に崩れ、幾千里の雪の中を、彼は幾日も根気よく歩き廻つた。ビッグ・ジム・マックケイもそうした一人ぼつちの探險者の一人であつたが彼は幸福にも大きな金銀を探し當てた。
ブラック・ライオンも此の雪中に一人ぼつちの人間であつたが、彼は法律の手を逃れて来た悪人だつた。
暴風が起つて偶然にも此の三人の一人ぼつちは、ブラック・ライオンの隠れ小屋で一緒に居る事になつて仕舞つた。嵐は轟々として幾日も續いた。食物もない三人は次第に餓えて来る。人間の浅間じきが彼等を襲つて来た。堪えられなくなった三人は到頭トランプを引いて誰れか一人嵐を衝いて食物を探すことになつた。ブラック・ライオンが其の役に當つた。嵐の中をライオンは出掛けた。二人は廣漠たる雪のアラスカのちつほげな小屋の中で、寒さと餓に身かふるはせながら其の歸りを待つのであつた。

説明 徳川 夢聲 伴奏曲目選定 貫洞喜代治



ユニオンテッド・アーティストツ映画
キートン將軍 全八卷

略筋——西曆一八六二年南北戦争の時、両方に數千の愛國者が起つた。彼等は第一線に立つて華々しい合戦をしたのであつた。余り榮えない役に甘んじなければならなかつた。此の下積みの勇士の中に一人の南方の青年が居た。彼は幾度も兵士になりたくて申込んだが、將軍の機關士として働く方が彼の爲だと言ふ理由でいつも斥けられた。
青年は、自分が義務をよく果し勇氣あることを人々が認めて呉れない事を意に介しなかつた。然し只一つ彼の苦痛であることは戀する娘までが彼を兵役忌避者だと思込み「貴方はあの薄汚い軍服を着てくれないのでせう、そんな男らしくない方大嫌ひ」と手厳しく劔付けられてからは、ジョニーは「將軍」より他に友を交さずする者はなかつた。其の機關車は、彼の誇りであり歡喜であつた。それを偉大なる巨人として充分な手入れをして獨り満足して居た。銃を肩にこけて働くのが愛國だとはかり考へて居る友人達は彼を嘲笑した。又其の中には彼の戀敵も加はつて彼の鐵道勤務は兵隊が嫌さの通辭だと言つた。俄然一八六二年の春、兩國間に恐ろしい歴史的特筆すべき大激戦が起つた。

説明 山野 一耶 伴奏曲目選定 長谷川秋甫

の此の山を一峰の後午睡を令えんと女兒の泣く
隙に身を彩るの武花や彼と行く、あまの映畫
が通つをそこのを睡我ハ終ニ妨げん也。アラ
スカの捕面の長夏物。●●●あることハ
其の積雪の天地であるからであるが例のチヤプ
リンが登場するの、滑杖方の味が添はせるも
得ぬ極度の艱難ハ滑杖者ハ不油和のもの
あるとおもふものも、その不油和のものハ
真面目にやる事に日チヤプリンの妙技がある
と云ふやう、チヤプリンの態を例に、例の如く
滑杖者が出るべき方の鴨式であるが、氣真面
であるけし、~~滑杖者の滑杖者がある。~~ ラース
ラスゲイイ味

の隠れ家に金拍が、おまを自分の靴の一方を、
へんてテンプラううして、おまや或る所の酒場
の控道中の仕舞を、流石にチヤプリンと
くして思へば、別して隠れ小屋が雪風を吹き
死んで、雪の紐産の際にヤット、停止し
屋の上合が紐産を、外へみる所、観衆
を、汗を握らせる、捕面は、其の家が、左
に傾く、其の危険する所、為し、此所、滑杖者
ハ、真剣味が、あつても、おま、あつても、
酒場の、ある、と、香、金鏡、見、俄、
分、限、と、る、の、由、誤、解、し、
新、変、記、者、に、消、え、て、消、え、る、時、此、女、を、推

へ、皆三ノ枝の前、三ノ、撮影の刹那、接吻を
し、新巻記者を困らせ、此所を、ハヤブリン
得意の所がある。アラスカの塔塔なる場面を滑
秋巻代、此の映画の苦心のあり、申す
まむかるる。

キートンの中、その、演復のキートン、この、
こえ、此役者、其の、特徴、ハ笑ハ、その、所、あ
る、世界、南北、戦、ある、か、實際、の、汽車、の、戦
争、といふ、方が、あつて、ある。南北、戦、の、汽車、
を、争、奪、する、其、例、三つ、兵士、の、選、に、漏、れ
此、中、核、闘、士、が、核、爆、の、軌、道、の、上、の、働
き、を、し、て、終、に、其、功、を、果、す、と、いふ、助、平

凡、の、軌、向、が、あ、る、け、ん、と、名、敵、に、奪、つ、た、汽、車、を
他、の、汽、車、と、同、し、軌、道、に、三、つ、ち、百、方、坊、で、完、了、す
所、に、先、途、七、あり、各、門、的、活、動、振、り、七、ある
七、戦、も、要、界、の、世、の中、に、ハ、此、の、故、の、劇、七、生
七、七、も、得、ら、い、か、未、回、の、興、け、ん、ハ、汽、車、を、
く、ま、い、玩、ぶ、こ、と、ハ、出、来、な、い、の、ひ、あ、ら、う、と、思、ん
也。

八月九日記

○横山某村集を後み二三句を摘録す

庵の月あらしを引く草垣に
狐火や霜降る雨の比まゝに
およぐ時よるへ春をこころに
おのへて火燵姫しき左に

七井戸や故に飛ぶ魚の音鳴し
故松つりし北平微つくる家のあ
不盡一ツ埋み身して花葉うらま
釣り上げし煙の巨公玉や吐く
五月雨の埤北の女しき花をうら
あかししくまきうらまふ花母の恩
花母の懐抱あまさをあし

○花柳界のあはれ一おし二かか三きりやう
とあり、この妓界を横りしは法を多ふお例
に就てまふはのびあふ、このまゝもかかたあす
し七至るまふ、きりやう七又まむひあふ。故の一

概にかかるときりやうとむ捨く得んまこいあふまふ
知んる。勿論春の年か筆一階板らむひ、此の三
階の誘因とまふか法と法とまふかの順序
の狂ふことかある。初心のまふか、しつこくまふ
も才一と一か法をまふか、まふか、まふか、まふか
何をて一措か法か法かまふか、まふか、まふか、まふか
まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか
所謂、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか
まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか
いからまふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか
ひまふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか
ぬまふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか、まふか

る、魔くが、ある

○日本人ハ潔癖であるといふ云へるが、志かしき潔癖ハ、徹底してゐる。ともすると、唾、蒲團をかき、枱、又する、ことを、何んとも思はる。毎日の浴、す、る、の、潔癖、あ、る、と、同、一、手、拭、カ、ワ、ル、が、汚、穢、部、を、洗、ひ、ま、ん、が、厨、下、野、も、洗、つ、て、平、氣、お、い、る、の、大、小、の、便、所、に、満、ち、汚、穢、を、蓄、積、し、て、い、ん、も、も、氣、を、か、け、ぬ。習、慣、い、お、う、ま、い、ま、い、か、あ、る。○自、分、の、好、む、花、は、何、る、ま、あ、ば、か、り、茶、の、花、が、す、き、拖、子、の、花、が、す、き、菫、子、の、花、が、す、き、せ、薔、の、花、が、す、き、葵、の、花、が、す、き、と、あ、る。茶、や、拖、子、の、や、薔、の、花、は、さ、び、し、味、が、あ、つ、て、ま、い、こ、な



盛 日
畫 平 草 口 山

幽玄の味がある。茄子の花は多く人に厭みえらるゝが
其の色が黒ずんの地氣がある。家三種の茶味
がある。其の地氣がモット流手でありとすべし。願み
るは是らぬ。藜も七丈高く延びるのよも七、小さなるあ
る味がある。此草の花は多く人に持て難きん
るの類は適けてゐる。藜がある。まこは却て人に愛
せらるゝ趣がある。

○佛名を唱ふんば池中に蓮花散くある。感念定
こいやろこひある。念を起すべし。詠し此詩が祇
南海にある。難題。ささるゝ。信。揚。ひ。あ。の。め。て
念佛の真諦、觸れしめる。

佛名一念結一蓮 十百念未十百蓮千
億萬念念千億蓮 念の大千皆寶蓮誰
知一蓮誰一蓮 大地山河原一蓮 我在蓮中
不知蓮 一口終開即是蓮 君不見鉢中
之蓮火中蓮 依然池中念佛蓮

REFRESHMENTS TO BE PAID FOR AT REGISTER COUNTER

○御會計ハ會計係へ御拂ヒ願ヒマス○

COLD DRINKS

Plain soda	05	アレンソーダ
Soda water (any flavors)	20	ソーダ水各種
Water Ice	20	ウオーターアイス
Ice cream (any flavors)	20	アイスクリーム各種
Ice cream soda (" ")	30	アイスクリームソーダ各種
Ice cream sunbae	30	アイスクリームサンデー各種 (Chocolate, Strawberry, Pineapple.)
Ice cream nut sundae	25	アイスクリームナッツサンデー
Cold coffee	15	冷 コ ー ヒ ー
Cold tea	10	冷 茶
Ginger ale	20	ジンジャーエール
Root beer	20	ルートビア
Coca-cola	20	コ カ コ ラ
Sarsaparilla	20	サ ー サ パ リ ラ
Lemonade	25	レ モ ネ ード
Orangeade	25	オ レ ン ジ エ ード

SPECIAL SUNDAES

Aviators delight	50	アビエター delight
Banana specials	50	バナナスペシャルス
Robin hood	50	ロビンフッド
Liberty special	50	リバーティスペシャル
Chop suey	50	チャップスイ
Nut salad	50	ナッツサラダ
Lovers delight	50	ロバースタライト
Banana cream	50	バナナクリーム
Orange special	50	オレンジスペシャル
Maraschino	50	マラスキノ
Cocoanut delight	50	ココナツ delight
Pineapple bonbon	50	パイナップルボンボン

EGG DRINKS

Egg chocolate	40	エツグチヨコレート
Egg phosphate	40	エツグホスヘート
Egg fizz	40	エツグフイズ
Egg flip	40	エツグフリツプ
Egg malted milk	40	エツグモールテツドミルク
Plane malted milk	30	アレンモールテツドミルク
Egg lemonade	40	エツグレモネード
Egg de creme	40	エツグテクレム
Fujiya flip	40	フジヤフリツプ
Fujiya cream shake	40	フジヤクリームモーキ

FANCY DRINKS

Grenadine punch	30	グレナデンパンチ
Champagne freeze	30	シャンペンフリズ
Cherry cocktail	30	チェリーコクテイル
Orange blossom	30	オレンジプロツソム
Pineapple cooler	30	パイナップルクーラー
Cream de menthe	30	クレムデメンツ
Columbia special	30	コロンビアスペシャル
Grape freeze	30	グレープフリーズ
Grape cobbler	30	グレープコブラー
Pineapple smash	30	パイナップルスマツシ
Fruit punch	30	フルーツパンチ

HOT DRINKS

Tea	15	紅 茶
Coffee	20	コ ー ヒ ー
Cocoa	20	コ コ ア
Chocolate	20	チヨコレート
Postum	20	ポ スタ ム
Bouillon (with cracker)	20	ブイヨン(クラツカー付)
Tomato cream bouillon	30	トマトクリームブイヨン
Pie	20	パ イ
Ice cream pie	40	アイスクリームパイ
Sand wick	40	サンドキツチ
Cakes (for tow)	16	洋菓子 (一皿)

氣勢一層盛んうしからずある。此意味
に於て和室の才二の里船とも云く得る
の心ある勿論木葉に世界の風潮は此
等里船が日るも七幕府を西復し
たませよ

一 薩摩が幕末に齊かに琉球と密貿易
をやり、其の高島と巧を賣つて四を賣し
たこと、隠れもまゝいさ定むある併しこのこ
との幕府に切れたの、全津からバレットと云
かんとある、今仲の漆器の製を所ひある
と多く、朱を要する、此より自由時朱の
價が踊る不慮ひあつたの、どこころと云

く價の廉も朱が輸入せられ、此ことから足
がつき、幕末が洩ると、えんを以後を託
て金貨に入つたことかであらう、その輸入者か
薩摩ひあること、切れたのひある。新内
の云屋ひある、此に松木長花の先代らひい
えん、せし江戸の宰に、製業ひんた、下は
その時方、回者英が入宰し、そのおん
木、毎日、其の甘名と、其の字、を
口を暮り、此、鈴木の出獄の時、長英と
且の祝し、且の長手、を失ふことと、深
く歎し、といふ、流七、病のひある

一 薩摩の密貿易船、戦後のどの、(一)の海

沖貿易もやつた。よのひあたらしく、新島より
幕吏が去れりしをわかれ、この港も無
客の荒れもあらう。自今、御里北斎原郡の
海邊より志井濱や村松濱や水戸濱
や松ヶ崎の舟、船外りの橋本があらう。互
村松濱の平野と家るむ。船も市院
のこのかありれば、よのひあたらしく、是れ
とありしとありてある。自今、志井の巻草
洲の平野、よのひあたらしく、是れよのひあ
たらしく、よのひあたらしく、密にわかの事か記さ
れてあり。薩摩船、よのひあたらしく、呼ばれ
よのひあたらしく、呼ばれよのひあたらしく。

一 いろいろ村松濱はかりし。志井濱も
破る。沖貿易をやつた形跡がある。や
よのひあたらしく、御里北斎原郡の
母方の石村に成辰の頃、おれと住し。こ
とがある。よのひあたらしく、自今、志井の巻草
洲の平野、よのひあたらしく、是れよのひあ
たらしく、よのひあたらしく、密にわかの事か記さ
れてあり。薩摩船、よのひあたらしく、呼ばれ
よのひあたらしく、呼ばれよのひあたらしく。

輸の品に貼付せんとし、あつたものは、
百い、コシナ西洋物と各額きんじきとを
つと、琉球品を動やれ、薩摩、**船**、沖合
物と、比りみひ無のれやうも、思ひる。

一 赤城又次郎が、東に流次、西本保春のすゝこ
と、西本に安積良二とせ、昌平、貴を
督、比、あ後の儒者、花吉家を以つて
史、こへ比、三萬冊を、た、比、去、い、ん、書、成
カ、後、種、あ、比、と、云、い、て、み、る、也、と、る、石、は、か
りの瑞家人の出である、其人の先代、深
川の不動を、置、い、れ、人、也、ある、と、か、保、春、は、

考証家の狩谷棟方の流を引ても、其
書、の、多、く、あ、ん、と、も、多、く、の、經、を、も、稿、を、の、ま
す、こ、の、類、を、嘉、永、文、庫、に、花、し、て、あ、る、此、人
半生の名を、混へて、康、延、字、典、を、原、者、に、謝
つて、校、直、訂、し、比、こ、も、あ、り、校、訂、に、努、力、し、比
こと、か、の、う、く、る、い、。木村正研、その、此、人、の、所、人
である、犬木存任、保、春、と、の、殊、に、親、筆、に、あ
つ、比、云、い、ん、て、あ、る、。此、人、が、著、而、賦、の、念、を、見、し
比、勤、樹、い、先、代、の、墓、を、展、す、る、途、や、り、古
名、甲、尾、と、大、里、天、と、考、い、比、幅、も、大、阪、の
病、の、本、り、金、つ、き、い、あ、る、の、を、讀、ん、て、め、つ、る、も
と、感、し、ま、ん、か、ら、俟、ま、す、身、を、奉、り、比、か、い、



(圖之寺草淺) 咄 戶 江 補 増 板 年 七 祿 元

從僕らもいふに寛大であつたといふと、石里男
 守の流る幕末の考物と志のあつたといふ時
 高もいふ考物を借魂といふといふと、夢つて
 へたこととある。

○夏時状(ともし)といふかざりく

ぬおろろろ路次やな、ちすたん、
 麻のちふん、毛斯の葉子黒

新しき花、山あゆ橋

あ磁の花瓶、かろりよとこ薑香、柳粥

熱茶、濡しある金山、金玉糖

新しき浴衣下帯、廣き紋帳

熱湯を盛る杯洗、無地り固扇、味噌吸物

浅草寺

寺田にあり

六冊本

價三十五圓

源平忠遺塚



万治二年版

金王一本

山本九兵衛版

價二両五十四

大改の出版

中村積徳堂の

目録ありあり

雪のしやーペット

氷漬のアスハラガス

又三 陶器の研屏

殿殿の詩本

風鈴

エスキモバク

洗ひ済めの麻のハンケチ

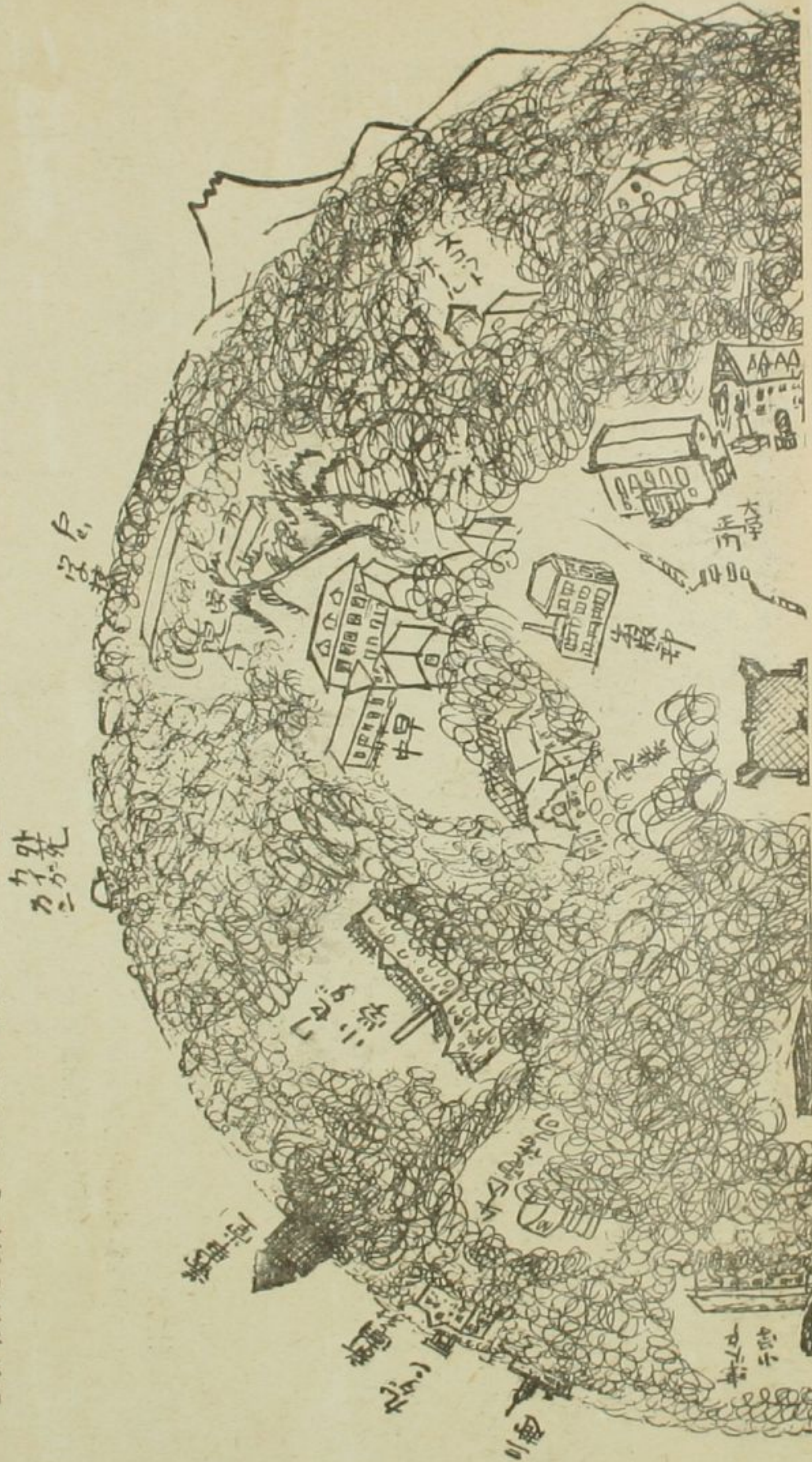
玉印

香炉

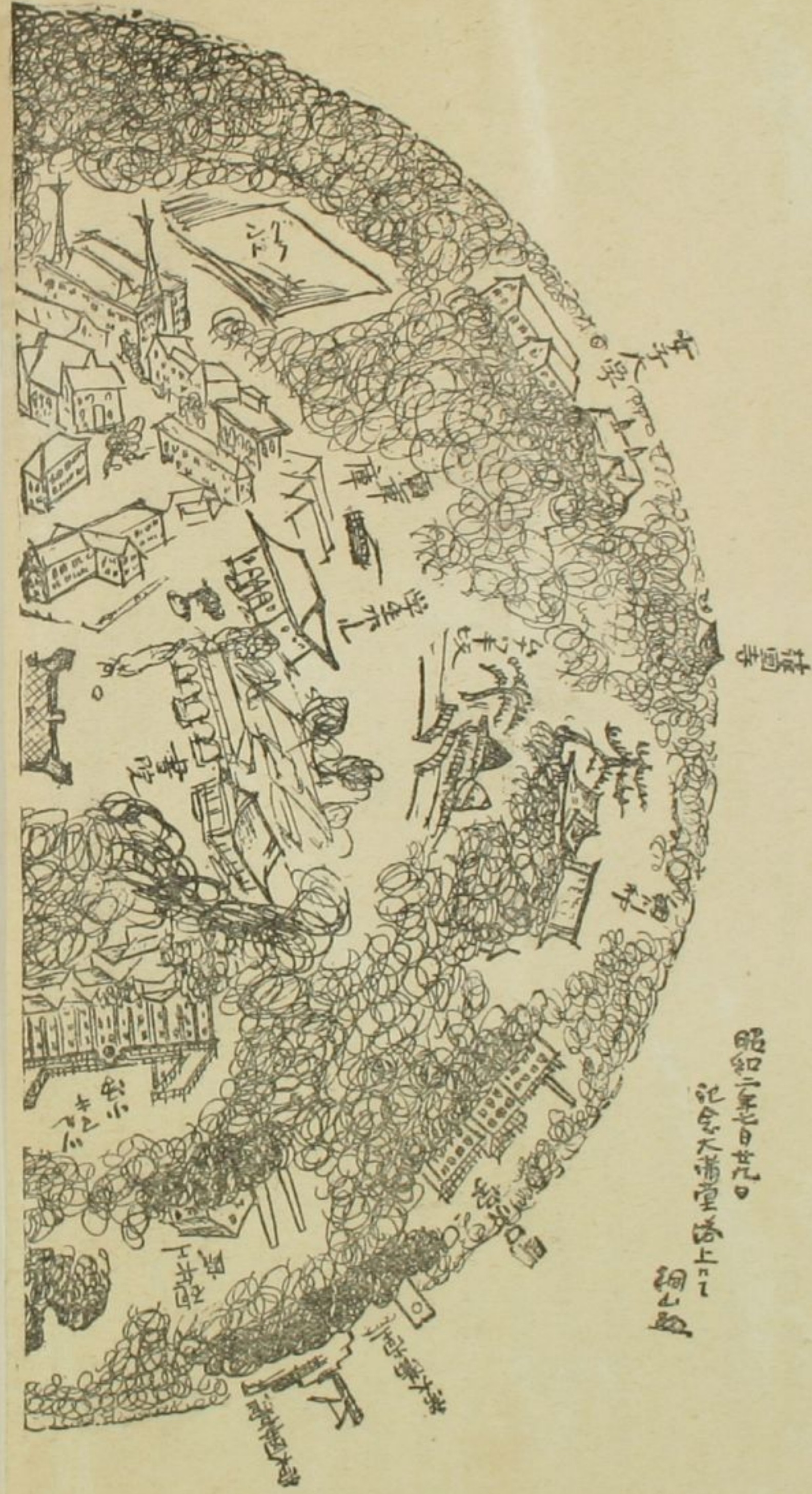
サハリの茶壺

同上茶托

この秋の四十五周年祝典を前にして、記念大講堂は、関係者一同汗だくでその工を急いでゐる。外部の大半は出来上つて、ただ塔の上方一部だけが、未完成で残されてゐるだけだ。その塔——遙か江戸川の停留場から、斬然聳へ立つ雄姿の上半身を見ることが出来る——その百三十尺の塔上に、桐山技師を煩はし、スケッチして頂いたのがこの『講堂の塔から』である。早稻田を偲ぶよすがにもなれば幸ひである。



講堂の塔から



昭和二年九月
記念大講堂の上
桐山

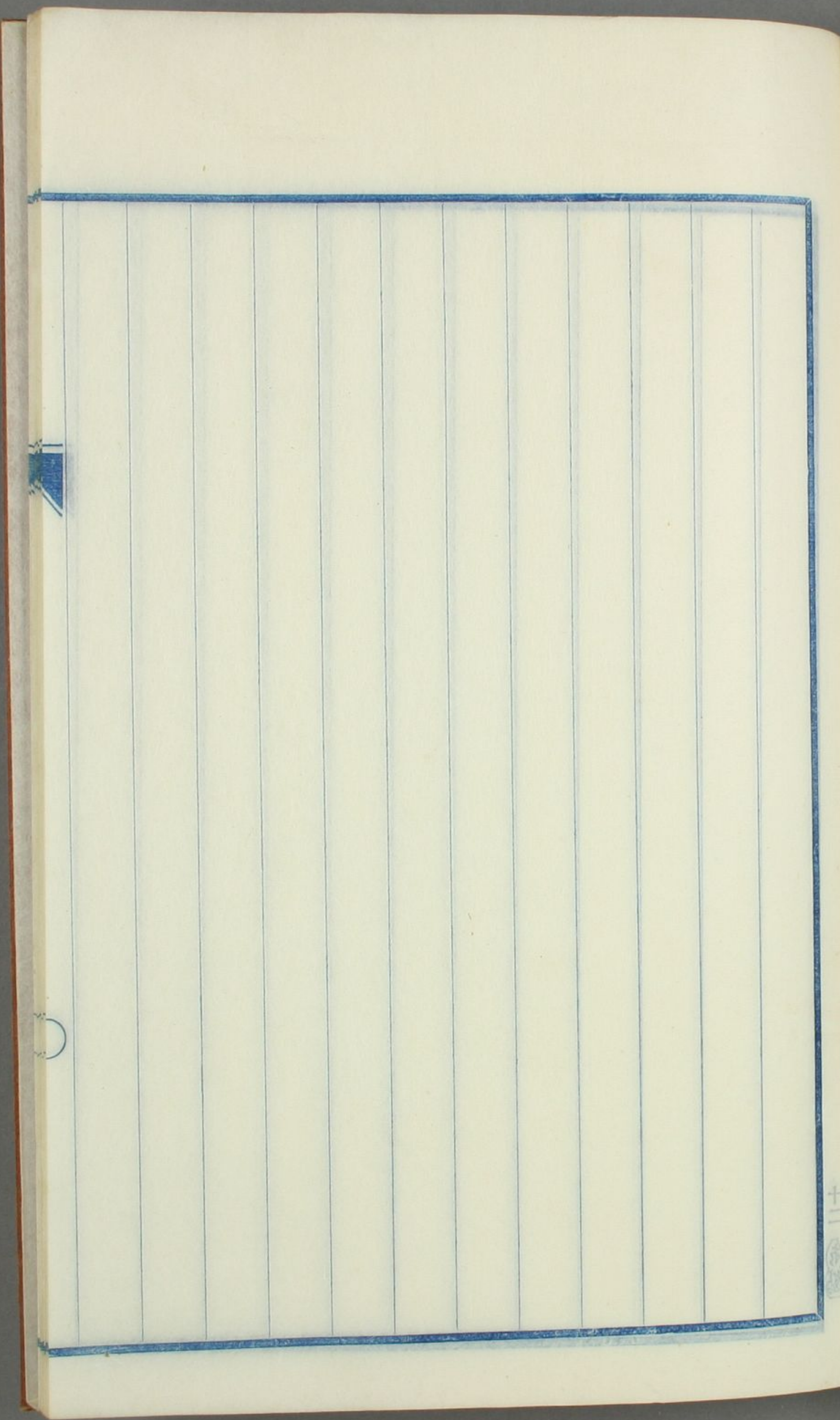
八月號早稲田學報所載

のつから約束があるを、新しき場合なる互ひの手を
貸して千手傳ふことなるうてあるを、支へ此、今
も此の聯の規約が存してあるかどうか、西
洋料理の、七千、身も満つる大きな客を
余する時、ウエーメーが幾十人も要す
別居一軒の店の集すべし、い、こん、親名
おのつから規約の、あると見へて、事、定、不、自
由の無いことなるうてある。

○日露の戦役に於て伊藤公は非戦論者であつた
の如く、侍く、え、お、山、好、之、帥、無、論、主、戦、論、者
と、考、得、た、ん、又、多、し、か、う、な、美、の、や、う、な、侍、く、え、ん、て、お、
は、北、次、地、内、将、軍、が、文、藝、學、部、と、考、得、た、

し、る、事、を、美、な、ら、う、と、考、へ、た、大、切、な、場、合、の、決、前、局
激、戦、の、神、り、伊、藤、公、が、主、戦、論、者、に、あ、つ、た、こ、と
が、南、時、多、の、合、戦、に、列、し、山、を、推、兵、衛、伯、に、信
つ、と、達、言、て、ん、て、お、ま、る、地、内、将、軍、が、伊、藤、公
より、直、接、交、え、ん、話、し、山、好、が、膝、痛、び、煎、火、之、切
る、こ、う、つ、と、云、々、に、伊、藤、公、大、不、平、と、あ、つ、た、と、い、や、ヶ
リ、ソ、の、地、内、を、付、け、し、新、橋、の、待、合、に、病、飲、し、
た、事、を、考、へ、る、世、界、の、大、戦、の、場、合、も、獨、り、と、敵、と、す
こ、こ、と、は、同、様、を、考、へ、し、た、の、大、隈、首、お、び、北、時、も
山、好、の、態、度、に、頭、を、悩、ま、せ、た、切、な、事、だ、
と、い、ふ、と、及、び、お、び、あ、つ、た、と、云、い、ん、て、お、ま、る、山、好、の、甲
人、に、あ、る、に、け、し、た、け、
露、獨、の、軍、状、に、恐、怖

一に云ふ一理あるが大切なる幕の軍人が切つて
是迄すべしとのかき、政事家の為すへき業は
あるから、山形が主敵論者ひるひかるといふと別々と思
議のあひが、何んじ七巻の事と云ふことと元帥の事と云
とするよの、**山**の心根こそ**西**の方の事とある

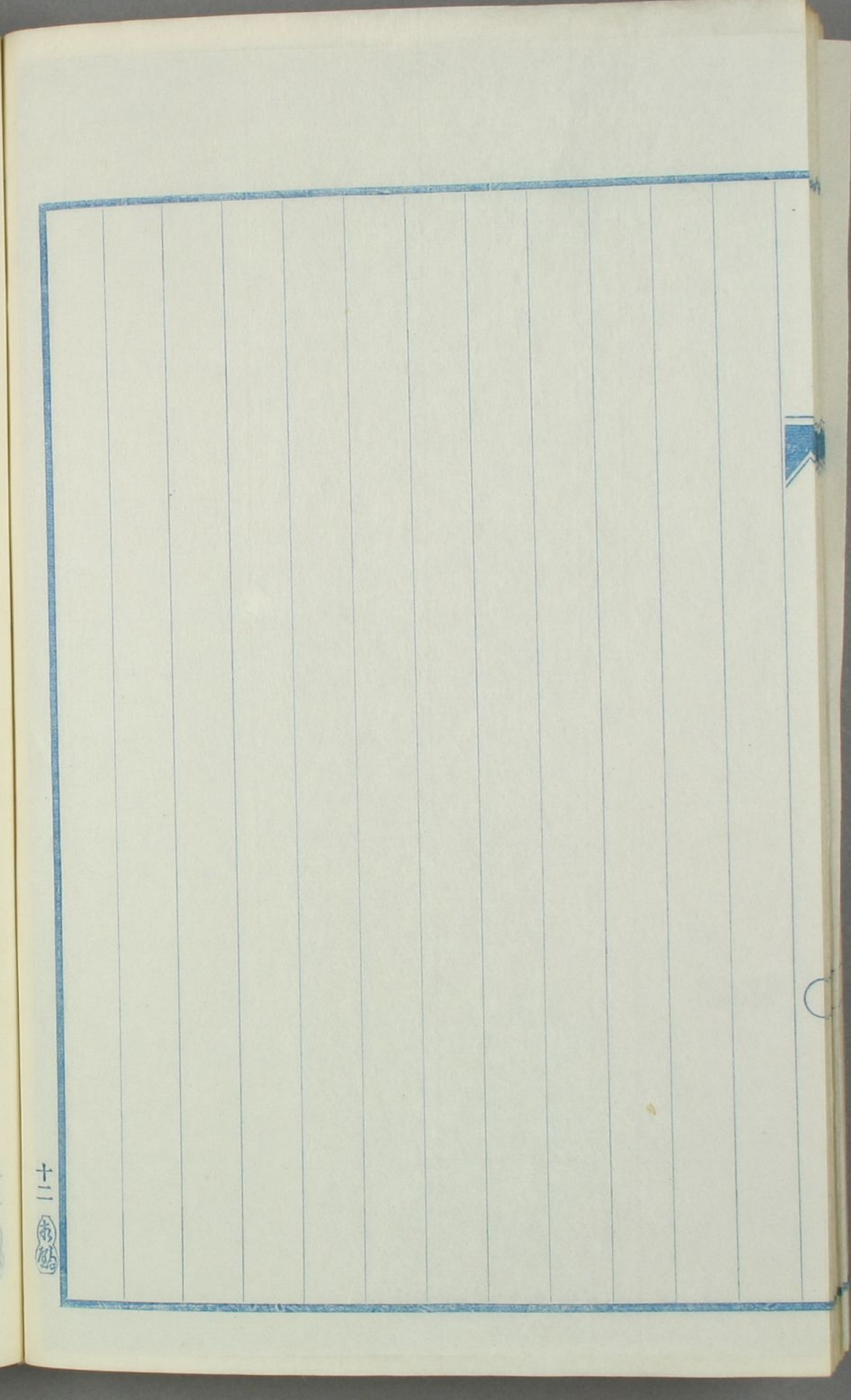


十二

十二

南

陽



以下
8丁
白紙



